

# 「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

——(付)「ユーモラス・コーベ」.

「ユーモラス・ガロー」掲載記事題目一覧——

大 橋 毅 彦

はじめに——一九三〇年の神戸元町鯉川筋の街景

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのように暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台となく自動車が駆け上って行く。

一九三五年に第一回芥川賞を受賞した石川達三の小説「蒼氓」第一部の冒頭である。坂道を上り詰めたところにある「国立海外移民収容所」を舞台として、ブラジルに移住するために日本各地から「落ち葉」のように吹き寄せられてきた人たちの乗船までの八日間の生態を描いたこの作品が、石川達三をしていわゆる社会派文学を代表する作家の

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

四五

地位に一気に押し上げたことはよく知られている。

小説のラスト近くに置かれた、東北出身の貧農の娘お夏の姿が印象的だ。彼女は自身にとつての懐かしいもの一切から切り離され、諦めのうちに港に向かって歩いて行くのだが、こんな風な心を持っていたかもしれない娘も含めて、この年神戸からブラジルに移住した人々は一三七四一名であったという統計が示されている<sup>(1)</sup>。「三月十五日」に「第三突堤」を離岸した「ら・ぷらた丸」に乗船した移民たちは「九百余」名であるから、渡航前の準備を整えた移民たちが収容所のある坂の上から神戸港に向かってぞろぞろと下っていく光景はこれ以降も繰り返されたはずだ。

ところで、小説中では移民の群れも、彼らの大荷物を満載したトラックの列も、同じ坂道を下りて行くという設定になっている。一九三〇年時点の「三ノ宮駅」（現在の「元町」駅）に近接する道路で、収容所を出たトラックが港に向かうとすれば、それは駅からやや東寄りに位置する「トア・ロード」を南下した可能性が高くなる。なぜなら、収容所の正面からその坂を下り、駅」のすぐ東側を通って港に向かうことの可能な「鯉川筋」は、当時道幅が狭く、いわゆる自動車制限道路となっていたからである。けれども、一方において、この「鯉川筋」が収容所から歩いて海に向かうのには最も至便で、当時「移民坂」と呼びならわされていた節もある。これらの点から、移民たちの行程は、トラックが歩いている一行を追い抜いて行く「トア・ロード」の場合もあったかもしれないが、その割合は低く（つまりその場合は小説としての虚構性の度合いが増す）、実際には「鯉川筋」が選ばれていた確率の方が高かったのではないかと思えてくる。

のつけから些細な点を足をすくわれがちな記述になったが、こうしたことに拘泥するのは他でもない、移民たちの大半がこの「鯉川筋」を下ってきた場合、元町一丁目の入り口近くで見えてはいたにちがいない、けれどもそれは生活の苦渋を背負って渡航していく彼らにとっては意識の罅に上されることのないままその前を過つていかれたと想像し

たくなる、同じ年に開設された芸術家たちの溜り場を、この小論では考察の要に据えようと考えからである。

## 1 神戸画廊と「ユーモラス・コーベ」

それは元大阪毎日新聞社神戸支局員で、この時期神戸洋画観賞会を主宰していた大塚銀次郎が同所（神戸市元町一丁目鯉川筋）で一九三〇年七月一〇日にオープンした、「画廊」という名称を持つ画廊である。「画廊」という名称を持つ「画廊」とはいささか奇異な言い回しだが、これは大塚の友人で一九二八年に大阪朝日新聞社神戸支局長として大阪本社から転任してきた朝倉斯道（芥郎）が、まだ画廊という言葉が定着していなかった当座、「ギャラリー」をもじって画家たちの足溜まりとなったこの場所をそのように名付けたからなのであって、その後、この「画廊」と提携する形で大阪に「大阪画廊」、あるいは東京を例にとれば銀座の「日動画廊」などが開設されて画廊という言葉が普及するに伴い、「神戸画廊」という名称を用いるに至ったし（ただし、その表記にあたっては「神戸」の二文字は小さくするという扱い）、あるいはまた、場所柄を反映しておそらく開設当初からそう呼ばれていただろう「鯉川筋画廊」という通称でも通っていた（以降、本稿では原則的に「神戸画廊」・「画廊」の呼称を併用していく）。

戦争の激化により一九四三年に閉廊するまで、多くの美術家たちの作品発表と交流の場として神戸の文化的土壌を耕す上で一役買った神戸画廊については、兵庫県立美術館が二〇〇三年一月から翌年二月にかけての常設展示中の小企画として取り上げており<sup>(2)</sup>、同館季刊誌「ART RAMBLE」のVOL. 3（二〇〇四・六）では山崎均が学芸員の視点から「画廊」の誕生 大塚銀次郎と神戸のモダニズム」という解説を書いている。また直近では二〇一七年二月に、神戸市立博物館の第二二回ミュージアム講座の一つとして「鯉川筋画廊」と美術家たち―戦前の神戸画壇を振り返る―と題する講座を同館学芸員辻智美が担当している。

これら先行する企画展パンフレットや解説文、講座用資料などを一瞥してすぐ気付かされるのは、いずれの場合においても神戸画廊の足跡や果たした役割を振り返る際に、同画廊が発行していた「ユーモラス・コーベ」と題する機関紙を、それとセットになるように持ち出していることだ。この神戸画廊の機関紙「ユーモラス・コーベ」は、総体としてさまざまな情報やユニークな風合いを持つ記事が載っている貴重な資料庫のだが、前出の活字資料においては紙幅や時間の関係もあって、そのコアにあたる部分が要約的に紹介されるにとどまっている。むしろ、それに比べると神戸画廊を活動の一拠点に据えた鈴木清一の評伝を彼の息子の鈴木耕三がまとめた『孤高の画家・鈴木清一の仕事と生涯』（二〇〇六・六、神戸新聞総合出版センター）の方が、「ユーモラス・コーベ」からの具体的な記事の引用件数という点からみれば、その数は勝っていると言える。ただ、書名からもこの本の執筆意図が推し量られるように、本文中で紹介される「ユーモラス・コーベ」の記事の選択基準は鈴木清一の動向を伝えるものに限られがちになっている。

以上の点をふまえて、この後の論の運びの中では、ローカリティの宣揚、モダンと伝統の混在、東京との文化的通路を考える際に見えてくる融和と対立の位相など、「ユーモラス・コーベ」の中にある問題系をできるだけ多く指摘し、拾い上げていこうと思う。それらは当然神戸画廊がいかなる場であったかを伝えてくれる指標にもなるはずだし、さらにはその先に広がっている、一九三〇年代の神戸が持っていた文化空間の一翼をも照らし出す鏡ともなるはずだ。そして如上の考察を終えた後には、補助資料として「ユーモラス・コーベ」掲載記事題目一覧を掲げることにする。なお、今回の考察と資料紹介にあたっては、兵庫県立美術館が所蔵する一九三二年一月発行の創刊号から、一九三九年一月発行の号数の記載のないもの（おそらく通算では第32号になると思われる）までの三二号分を、館の了承を得て活用させていただくことを予め記しておく<sup>(3)</sup>。

## 2 「ユーモラス・コーベ」(「ユーモラス・ガロー」)の輪郭

さて、いまも述べたように「ユーモラス・コーベ」は一九三二年一月一日に創刊された。A4版の四頁仕立てとなっており、ユニークな題字デザイン【図版A】は、元神戸大丸百貨店宣伝部付デザイナーで神戸画廊開設の年には大阪高島屋宣伝部(図案部)に入社していた今竹七郎が担当している。奥付には「発行所 神戸市元町鯉川筋画廊／編輯兼発行人 神戸市灘区河原町五九一 大塚銀次郎／印刷人 神戸市神戸区下山手七丁目 高見 太郎(姓と名の間に一文字分空白があり、二号以下で「高見重太郎」の誤りであることが知れる。\*大橋注)／定価 十部まで金一元」とある。定価に関する表記が第10号から「一ヶ月年金一元」(第26号以降は記載なし)となり、発行所の住所表記に関しても「神戸市元町一丁目鯉川筋」、「神戸市元町一鯉川筋」、あるいはまた「画廊」の二文字を改行して示すといった変更はあるが、判型と頁数、題字デザインの担当者、発行所、編輯兼発行人、印刷人の方は変っていない。

刊行ペースは一九三二年と三三年は発行日が異なるも毎月一回のペースだが、三四年以降になると前号との発行間隔が二ヶ月、三ヶ月と開いていく。一度だけ一月で二回発行されたケースがあるが、その反対に第25号(一九三四年・四・一〇)から第26号(同・一・二・三)までは八ヶ月、第29号(一九三五年・五・二〇)から第30号(一九三七・一・一)までは一年七ヶ月、第31号(一九三七・四・一)から「昭和十四年元旦」の新年挨拶が巻頭に置かれた号数記載のないもの(一九三九・一)までは一年八ヶ月といったブランクが生じている。これら長期の休刊に至った理由については、「世間並に財政困難とモ一つは余り憎まれ口を叩いたので暫く謹慎して居りました」(「再刊の辞」(第26号))、「余り悪口や冗談を書きつくして、面白い材料もなくなつてしまつたのと、もう一つは時節柄国策に応じて紙と費用の節約をしてゐた」(「ユーモラス・ガロー 再刊の辞」(一九三九年一月発行誌))のように、韜晦と本音とが混じり合った口吻(署

# HUMOROUS KOBE

## 創刊の辭

今度畫廊を中心として、創刊致しました HUMOROUS KOBE は、恐らく NIPPON で一番高價な、一番英邁英邁しい新聞であらうと存じます。

處で幸に、日本で一番賢明なあなたが、本紙を御愛読下さいませれば賢愚兩極端が遂に言ひ合致むたしまして、この深刻に不景氣な、陰鬱限りなき現世界が、多少とも朗らかなものに好轉して參ることと深く確信致します。

斯るいとも怪し氣な自信のもとに吾人は恥を忍んで、本紙の編輯に取り掛りました。

大方落着の御愛讀を、編輯局員一同に代りまして、一重にお願ひ致す次第で申します。

畫家志望者

## 天文試験問題

答案解説

日本人アイ・セブンスキー

先づ氣を落つて左の呪文をフルスピードにて十三回一語の云ひ間違ひなく云ひ續けること、熟練することを要す。

『畫かき畫賣つて畫で喰つて人喰つて夢喰ふ』  
愈急問題にとりかゝります緊張!!

### 第一問題

太陽のなかにも獨立星、二科展、帝展に比すべきものありや

答 有之候コクラン

### 第二問題

月と畫家と何れが家いか  
答 畫家の方家し。お月様は夜お酒を飲むことが出来ません

### 第三問題

地球は楕圓か圓か  
答 寫生して見ないと判りません

投稿數

他人の生活を脅かさない程度の惡口強口權代目

餘りエロげらず顔を含はして笑へる極度の冗談

其他ユーモラスな記事や歌謡千紙し投稿無件

尚ほ改訂は編輯者の特權として許容ありまし

本朝子「いり」にける、余船何ぞや、  
末廣の港賑わし元氣や戀しこひしの  
御川筋に、つどふ納のわざ見ししの  
合「うきにこりえをよそに見てしは  
し心の懸ひをば、さうぞゆつくり近  
ばせと、よもにきこし新名所、こ  
いぞ畫廊の白雲節、二上り「はるか  
なたはふらんす、まろにえ花咲く  
巴里より、あつまの空や京大阪、西方  
十里の扇港に、名たる繪師が意を  
こめし、いろくさくの作品を、い  
つも飾りてみせのおく、合「くらに  
あそふ園藝將棋、だれちいぼんの麻  
雀もいと樂しぞ見えにける  
本朝子「もろびつとぶたのしさは  
春夏秋冬藝術の神祕をかたる風解瑛  
めでたくかしことうたひけれ、めで  
たくかしことうたひけれ

## 長唄「畫廊」

作詞 酒留波壽樓  
作曲 竹屋滿十郎

— 昭和七年 謹賀新年 一月元旦 —



繪廊派  
歌留多

繪廊は美なもの味なもの(美  
ガロウかどには福来るもの  
繪を賣つては加つてはめ  
繪の具下塗り手はたす(職  
久間義雄)

神戸市元町一丁目龍川路 畫廊 電話三三三三五一番

- 畫廊一月の豫定
- 一日 一五 日
- 祝賀休廊
- 六日 一九 日
- 神戸洋装部賞會
- 新着名作家作品展
- 十日 一二 日
- 第六回
- 鯉川會日本畫展
- 十日 一七 日
- 小磯良平氏
- 第十八回
- 洋畫個人展覽會
- 十日 一二十 日
- 第十回
- 商業美術展覽會
- 二十日 一二十五 日
- 木村繁男氏
- 滯歐作品展覽會
- 二十七日 一三十 日
- 畫廊同人作
- 繪物皿入札展覽會

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

名はないが、記事の目的からすれば大塚銀次郎の筆になるか?)でもって伝えられている。

また、「ユーモラス・コーベ」は途中で二回、第19号(一九三三・八・一二)から第25号(一九三四・四・一〇)にかけてと、第30号(一九三七・一・一)以降の三号分との名称が「ユーモラス・ガロー」と改題されている。うち一回目については、英国のウインザー・ニュートン株式会社(Winsor & Newton, Ltd)の日本代表事務所が大坂心齋橋に「大坂画廊」を新設、そこと連携をとりながら仕事を進めることとなったのを受けて機関紙名の変更に及んだことが「ユーモラス KOBE から GARO へ」(第19号)中に述べられている(このように神戸画廊の機関紙は二通りの名称があるわけだが、これ以降の本文では原則的に「ユーモラス・コーベ」は「コーベ」、「ユーモラス・ガロー」は「ガロー」と略記する)。ついでに言えばこの記事中には、それに伴って「発行部数も五千に増加した」といった、注目すべき言葉も記されている。ただ、それ以前の発行部数に関しての情報については未詳である。そして、購読者層についての情報も具体的なところはつかめず、「そのニュースに触れた人々は限られた美術関係者のうちに留まり」(山崎均「画廊」の誕生)といった考え方をするのがおそらく妥当であると思われるのだが、ただしその一方で、たとえば第14号(一九三三・三・二二)掲載の「画廊日誌」中「2月21日」の箇所で、画廊後援会による頒布展の動向を伝える際に「相当申込者があつて、殊に最近は地方からの申込が多くなつた」といった言葉が添えられている点にも留意しておきたい。

### 3 軽妙洒脱な持ち味をめぐって——神戸モダンの奥行き

再び「コーベ」創刊号(一九三三・一・一)に話を戻して、少し長くなるがまずは「創刊の辞」全文を引用してみよう。

今度画廊を中心として、創刊いたしました HUMOROUS KOBE は、恐らく NIPPON で一番高価な、一番莫迦莫迦しい新聞で

あらうと存じます。

處で幸に、日本で一番賢明なあなたが、本紙を御愛読下さいますれば賢愚両極端が寔に旨く合致めたしまして、この深刻に不景気な、陰惨限りなき現世界が、多少とも朗らかなものに好転して参ることに深く確信致します。

斯るいとも怪し気な自信のもとに吾人は恥を忍んで、本紙の編輯に取り掛りました。

大方諸彦の御愛読を、編輯局員一同に代りまして、一重にお願ひ致す次第でゐるます。

さほど格式張らない芝居小屋（劇場）で芝居の幕が上がる前に一座の座長が行う、軽妙洒脱な前口上めいた表現でも言えようか。一応のへりくだりを示しつつも、自分たちの拠るべきものは見失ってはおらず、世の趨勢をしかと見極めながら、それと対抗し得るユーモラスやくだけた味を売りにしようとする意図が感じられる。それは、「阿呆陀羅経」と題して「またも出ましたお笑ひ草は／チャカポコ チャカポコ／神戸名物画廊のニュース／チャカポコ チャカポコ」と始まる第30号（一九三七・一・二）巻頭の「再刊の辞」でも確認できるし、あるいは「大塚赤面子とかけて／サイドカーと解く／心は、いつも夫人を脇においてポンポン言つてゐる」から始まる「なぞかけ風な画廊人物見立」や、「重爆撃機 林重義」から始まる「画廊武器目録」、さらには「ユーモラスよろづ案内」「ユーモラス仕込案内」などといった、なぞかけ、見立て、パロディを売りにする記事がとつかえひつかえ現れることからわかるように、いつ何時でも「コーベ」ならびに「ガロー」全体に漲りあふれているものであった【図版B】。

おそらく、そうしたイメージづくりを支える人的資源としてマークすべきは、画廊主大塚銀次郎と画廊の名付け親朝倉斯道（芥郎）であろう。前職と現職の違いはあるが両者とも新聞記者としての仕事に長らく就いており、硬軟いずれの筆法も身に着けたジャーナリストとしての才幹の持ち主である。それをその後の機関紙に掲載および転載された大塚赤面子の署名のある記事で確かめるなら、画壇や画家の動向を伝えるものを取り上げても「第二回独立展にお

【図版 B】 [3点とも兵庫県立美術館所蔵]

なぞかけ風な

畫廊入乗物見立

大家赤面子さかけて  
サイドカーと解く  
心は。いつも夫人を船においで

林 蕪さかけて  
ロープ。ワエーイと解く  
心は。おぶなそいで大丈夫。

阪本 清通さかけて  
機關車と解く  
心は。人の先引してはローロー  
いつてゐる。

吉岡 三郎さかけて

探讐マガジンと解く

心は。夜になるど何處をうろつ  
くかわからない。

三木 龍男さかけて

自傳車と解く

心は。こまめに何人な細道にて  
も道入つてゆくし。曲乗  
とする。

佐久間よしとさかけて

海苔の佃と解く

心は。アローカッて葉つて毛唐  
なのせる。

2号 (1932. 2. 1) 掲載

エーモリア仕入案内

フライパン 料理一切何でも  
置く間に全入體用品代金ロハ  
六甲家ノ東販本舖製菓堂  
越中ふんじし品買上等寸先  
分あり。當方律儀並大廻強  
阪口通四丁目 教信齋月堂  
雜穀製菓糖將 中古なれど水  
久使用に強ゆ。所々クキあり  
先町三丁目 吉岡粉製堂  
五月人形 茶壺代傳に珍品  
具足經籠共一切安價に賣る  
本山村手木函。漆堂家  
紙製鹽鹼 口は大きく風  
をばらみ具合と遊さます  
武庫郡常屋 古田博一堂  
蕪竹 永紅燈のなれり品なれ  
ど當齊の燈め希客に賣る  
會下山頂 鈴木清一堂  
應器の鑛 行き返りともニ  
ヨリとエケンなく切れる優品  
川添郡中井町 綿原一原堂  
木口紙。プロ洋服につぎ進意方持  
住吉村樺ノ木 久弘一空  
海にの腰巻 入れたる本島羽  
普屋古新田 杉通三原商店  
備前徳和 見かけは  
がもく染んで價具各順に宜し酒  
四宮市川町 辻妻造商店

3号 (1932. 3. 3) 掲載

洋子メナ廣告

洋畫 材料 一切



洋畫材料箱様

文房 繪具

洋畫製造販賣 一切

神戶市北町三丁目  
電話三宮六五八番

文華堂

神戶市加納町  
三丁目交又路  
電話一九二九番

ただけ商店

洋畫材料箱様

神戶市平町一日  
電話一五七二番

昭花堂

轉移

4号 (1932. 4. 3) 掲載の広告欄

「マヂメな」とわざわざ断っているところが面白い。

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

ける兵庫県作家の活躍」(第5号、一九三三・五・五)のように定石通りのものから「仙人には勝テンデス 脱俗した熊谷さんの生活 個展延期の弁明」(第17号、一九三三・六・一五)といったくだけた感のあるものまで文章のトーンは単調ではなく、また読み物風の記事に目を向ければ、吉田博一氏原作「西部劇『ドン・ゼンザ』」(第22号、一九三三・一・一二)や三木瀧男原作「師走顔見世興行 扇港積話旭解雪 無断上演随意」(傍点Ⅱ大橋、第23号、同・一二・一五)のような仲間内で行う余興めいた劇や芝居の脚色を買って出ている。そして、無署名のものが多く、各号の巻頭記事の筆者も大塚だと仮定してそれらにも目を向ければ、そうした印象はさらに強まる<sup>(4)</sup>。一方、朝倉の署名のあるものは、そのほとんどが「大阪朝日新聞」から転載された美術展評であるが、彼もまた別の機会には「元町行進曲万容集」と題して、「まくら歌 これやこの、行くもかへるも元ブラは、知るも知らぬも逢引の、男女(ふたり)が西と東から、時をはかりて歩みよる、昼も絶えざるにぎはひを、そこはかとなく並べ立て、活字にうつし世のそしり、少ばかりはご免さふらへ」と歌い起こしていくような作をもつ人物なのである<sup>(5)</sup>。そしてまた、大塚、朝倉のこういった持ち味と連動、共振する書き手たちがいたことも見逃せない。「白髪野若造」なる署名で登場してくる、〈神戸モダニズム〉を代表する詩人竹中郁もその役を買って出ている一人で、神戸画廊で開催された他芸展の模様を伝えた「他芸天狗」(第7号、一九三三・七・一五)における筆の運びや、兵庫県美術家聯盟第五回展の開催にあたって寄せた「チャカホイ チャカホイで／ブラシを振れば／チャカホイ元気で／絵がかけた／チャカホイ チャカホイ」と始まる「レンメイ元気ソング」(第12号、一九三三・一・一五)にそれはよく表れている。

むしろ、芸術家や芸術愛好家たちのこうした愛すべき放埒さや無茶ぶりは彼らをもって始まったものではない。たとえば神戸出身の画家今井朝路が赤マントをひるがえして元町通を闊歩し、大正中頃(一九一八年)に須磨に建てた家に仲間たちを呼んでは「宵ドンの唄」<sup>(6)</sup>を合唱したことなどを思い合せれば、それは明らかだ。

ただ、そうしたことを問題にするのとは別に、ここでは、見てきたような「コーベ」ならびに「ガロー」に掲載された幾つかの記事が持っているジャンルや文体上の特徴や、それらによって紙面全体に醸し出される雰囲気や、約めて言えば近世（江戸時代）後期の文芸精神に淵源を持つものとして受け取れそうなことに留意したい。ここでもう一度創刊号を見直せば、「創刊の辞」と隣り合って酒留波綺櫻作詞、杵屋満十郎作曲の「長唄「畫廊」が「本調子」いにける合船何ぞうを、末広の港賑わし元町や恋しこひしの鯉川筋に、つどふ絵のわざ美しの侶」といった詞章でもって始められていることや、下段にも「伊呂波歌留多」ならぬ「畫廊派歌留多」が「ガロウかどには福来る（画廊主人）」といった具合に五句並んでいることが改めて面白く思えてくる。

そして、それと歩調を合わせるかのように、こんどは同紙に転載されている個展評中の評言を追ってみても、たとえば竹中郁の「川西英の版画展」（第13号、一九三三・二・一〇）は、神戸画廊に展示された川西の創作版画三九点が「古い伝統と教養」にも裏打ちされた〈諧謔〉や〈洒脱〉を持ち味としている点をマークしており、もう一つの「川西英氏版画展を見て」（第28号、一九三五・三・二〇）においても、『カルメン』とか『曲馬帖』といった川西の作品に「繪草紙趣味」の一端がうかがわれることを指摘している。こうした評価が成り立つ背景には、「川西氏は兵庫の古い商家の出で兄さんは有名な俳人和露氏をもつてゐられる」<sup>(7)</sup>ことも与っているわけだが、その一方、処女詩集『蜜蜂と花粉』をすでに上梓し、「海港詩人倶楽部」の主宰者として颯爽と神戸詩壇に登場していた竹中自身のプロフィールも、「コーベ」の中で紹介される段になると、第4号（一九三三・四・三）に掲載された俗曲風の作品「知らなんだ」を借りれば「竹中郁氏 モダン詩人と聞いてたが 長唄すきとは知らなんだ」といった具合になっているのである。これらの記事群から見えてくるものをふまえて、いわゆる神戸モダニズムもしくはモダニズム空間の一九三〇年代のありようを再確認するならば、それは海の向こうからやってきた新文化のみによって成り立つものではなく、日本

古来からある伝統文化の系譜とも隣接ないしそれを包含するかたちで、その態をなしていたと見るべきではないだろうか。少し脇道に逸れるが、この時期の神戸の探偵小説界の動きに目を向けるなら、そこでも神戸出身の作家酒井嘉七が、「ながうた勸進帳——稽古屋殺人事件」(月刊探偵一九三六・五)、「ふたおもてくらべほん両面競牡丹」(「ぶろふいる」同・一二)、「京鹿子娘道成寺(河原崎座殺人事件)」(「探偵春秋」一九三七・六)といった、〈長唄もの〉と称される一連の作品を書いていたことも思い合わされる。とりわけ「両面競牡丹」の場合では、「おりえんたる・ほてる」が窓の向こうの霧の中に浮かび上がる三の宮の「でばあと」と、常磐津の浄瑠璃にある「両面月姿絵」とが組み合わせられて物語が進行していくという趣向が凝らされている。

#### 4 各美術展評に見られる郷土色の宣揚

第2号以降ほぼ毎号掲載されていく「画廊日記」(「画廊日誌」と、各年度の最初の号に載る、前年度開催された展覧会名を列挙した「画廊一ヶ年の回顧」とは、神戸画廊関係者の動向や神戸画廊での催しを把握する際の貴重な資料庫の役割を果たしている。いま試みに後者を用いて同所で開催された展覧会数を数えると一九三一年が六〇回、三二年が七八回、三三年が六〇回、三四年が六六回、三六年が六六回、三八年が三九回となる。三五年度と三七年度については「画廊一ヶ年の回顧」の掲載時期が機関紙の休刊期間に入っているため不明、ただし「ガロー」第31号(二九三七・四・一)に掲載された「画廊を改造したいデス」と題した記事本文からは、「画廊が出来て足掛け八年(中略)その間各種の展覧会を開く事三百何十回」という言葉が拾え、そこから画廊が開設した一九三〇年度(七月の開設だから実質は五ヶ月)と三五年度に開催された展覧会数の合計も凡そ割り出すことができる。一九三八年を除けば、毎年ほぼ六〇回に及ぶ展覧会が開催されていたのであり、その種類を挙げれば「油絵あり、水彩あり、ガツシユあり、日

本画あり、デッサンあり、モノチップあり、リトグラフあり、木版あり、ガラス絵あり、ポスターあり、商業美術あり、写真あり、人形あり、陶器あり、染織あり、彫刻あり、手芸あり、本職は勿論、素人の余技展までやつた」<sup>(8)</sup>と  
いうように多岐のジャンルに及ぶものであった【図版C】。

次いで、展覧会を開催した人たちのラインナップと、彼らの作品を評したもので各新聞より随時転載された展覧会評との関係についての第一印象を記せば、それはやはり地元神戸もしくは兵庫県ゆかりの美術家の作品を取り上げて、神戸のローカリティを前景化し、郷土色の宣揚に努めたものが目立っているということになるうか。前出竹中郁の川西英の版画展評も当然その一つに数え上げられるものであって、まだ引用していなかった同展覧会評中の別の一節をもってそのことを確認するなら、「ピカソがいつた『阿片の匂ひはよいものだ。曲馬か海港か、これに匹敵するのみだ』と。(中略)ピカソのこの言葉はまるで川西氏の芸術をながめて発せられたかのやうだ。／この古い港で生れ育つてきた人間のみが感じる異国風なノスタルヂイと、あの少し寂しくうら悲しい曲馬と、いつも疲れた心を愛撫してくれる海港の景色にことよせて、純情な川西氏は人しれず自分の芸術をもりたて、来られた。それが開花して罌粟をさかせ、私はそれを嗅ぐだけで阿片に酔ふたやうになるのである」が、それにびたりとあてはまる【図版D】。この他の竹中の美術展評でくだんの要素が含まれているものとしては、第2号(一九三二・二)の「小磯良平君の個展を見る」(二月十四日、又新日報所載)、第22号(一九三三・一一・二二)の「衣巻寅四郎氏の個展」(大阪朝日新聞十一月十一日所載)、第26号(一九三四・一二・二三)の「福島氏個展を見て」(大阪朝日新聞十一月廿五日所載)も挙げられよう。川西英は木版の世界で活躍した人物だが、水彩画のジャンルで神戸色を鮮明に打ち出した画家で、「倉庫街風景」で一九三二年に二科入選を果たした後、翌年四月に画廊で初の個展を開催、「コーベ」においてしばしば取り上げられているのは、神戸市湊西区生れで兵庫県立工業学校機械科の教師の職にあった別車博資(本名繁太郎)である。こ

## 畫廊一ヶ年の回顧

觀賞會新春洋畫展…… 1月 6日— 9日  
 第六回鯉川會日本畫展…… 7月 10日— 12日  
 小磯真平氏個人展…… 7月 14日— 17日  
 第十回商業美術展…… 7月 18日— 20日  
 木村益夫氏繪紙作品展…… 7月 21日— 25日  
 燒繪皿入札展…… 7月 27日— 30日  
 第九回畫廊會洋畫展…… 2月 1日— 4日  
 吉田博一氏ワグネル繪展…… 7月 6日— 9日  
 第七回鯉川會日本畫展…… 7月 10日— 12日  
 坂本益夫氏神戶情緒展…… 7月 13日— 16日  
 新興寫真展…… 7月 18日— 19日  
 田村孝之介氏個展…… 7月 22日— 25日  
 第二個アマチュア。パステル展…… 7月 27日— 28日  
 第十回畫廊會洋畫展…… 2月 1日— 4日  
 第一回庚午社日本畫展…… 7月 5日— 7日  
 第八回鯉川會日本畫展…… 7月 10日— 12日  
 櫻川一鶴山本春郷氏日本畫個展…… 7月 11日— 16日  
 第十一回商業美術展…… 7月 17日— 20日  
 橫手貞美氏繪紙遺作展…… 7月 23日— 27日  
 淡沢弘氏畫展…… 7月 28日— 30日  
 中山正實氏洋畫展…… 4月 1日— 4日  
 釣趣の展覽會…… 7月 6日— 9日  
 富田讓仙氏新作個人展…… 7月 10日— 12日  
 鈴木浩一氏西英氏帶之バラソル展…… 7月 14日— 16日  
 第十二回商業美術展…… 7月 17日— 20日  
 所藏洋畫賣立入札展…… 7月 22日— 24日  
 黒木橋足氏性格寫真展…… 7月 28日— 30日  
 第十一回畫廊會洋畫展…… 5月 1日— 4日  
 緒大日本彩色紙展…… 7月 6日— 8日  
 第一回神戶創作團案展…… 7月 9日— 10日  
 第九回鯉川會日本畫展…… 7月 11日— 12日  
 第二回DOLMEN洋畫展…… 7月 14日— 16日  
 第一回種島展…… 7月 21日— 25日  
 中村真以研究會日本畫展…… 7月 24日— 26日  
 第十二回畫廊會洋畫展…… 6月 1日— 4日  
 現代素描選集展…… 7月 8日— 11日  
 久本弘一氏洋畫個展…… 7月 14日— 16日  
 第十二回商業美術展…… 7月 17日— 20日

山本大慈氏柳川一鶴氏親子團扇色紙の會…… 7月 21日— 25日  
 第一回種島展…… 7月 21日— 25日  
 小磯真平氏蒐集現代大名作家寫真展…… 7月 25日— 30日  
 第十回鯉川會洋畫展…… 7月 10日— 12日  
 村上一雄氏洋畫陶器作品展…… 7月 15日— 17日  
 東郷青兒氏洋畫展…… 7月 22日— 24日  
 第二回神戶創作團案展…… 8月 1日— 2日  
 清水登之氏上海事變洋畫展…… 4日— 6日  
 第一回種田眉仙氏懸下の新風景展…… 7月 15日— 17日  
 第十四回商業美術展…… 7月 18日— 20日  
 第二回種島展…… 7月 21日— 24日  
 伊藤殿之助氏繪紙記念小品展…… 9月 1日— 5日  
 第二回種田眉仙氏懸下新風景展…… 7月 12日— 17日  
 第十五回商業美術展…… 7月 18日— 20日  
 二科系洋畫展…… 7月 21日— 24日  
 畫廊洋畫公募展…… 10月 1日— 4日  
 杉道三郎氏洋畫小品展…… 7月 5日— 8日  
 山崎省三氏洋畫個展…… 7月 11日— 12日  
 第十六回商業美術展…… 7月 18日— 20日  
 第三回種島展…… 7月 22日— 24日  
 カイスタダヤ。ポストカード案展…… 7月 25日— 27日  
 寄展作家小品展…… 7月 29日— 31日  
 第二回畫廊公募洋畫展…… 11月 1日— 4日  
 淡交會洋畫展…… 7月 5日— 7日  
 種田眉仙氏新風景第一輯即賣展…… 7月 8日— 10日  
 四器會洋畫小品展…… 7月 11日— 13日  
 第三回神戶創作團案展…… 7月 14日— 16日  
 第十七回商業美術展…… 7月 18日— 20日  
 林重義氏新作洋畫展…… 7月 22日— 25日  
 野川清翠。岡本爲治。木村二瓶子  
 新作陶器展…… 7月 26日— 28日  
 第一回畫廊後援會噴布展…… 7月 29日— 30日  
 第三回畫廊公募洋畫展…… 12月 1日— 4日

伊藤齋郎氏洋畫展…… 7月 5日— 8日  
 本の趣味會古書即賣展…… 7月 9日— 10日  
 岡田七藏氏小品展…… 7月 11日— 14日  
 大慈。一鶴新作洋畫展…… 7月 15日— 17日  
 同情週聞入札展…… 7月 19日— 20日  
 第四回種島展…… 7月 22日— 24日  
 種田眉仙氏新春用即賣展…… 7月 23日— 26日

### 樂燒と粘土の會

二月十五日より十七日まで

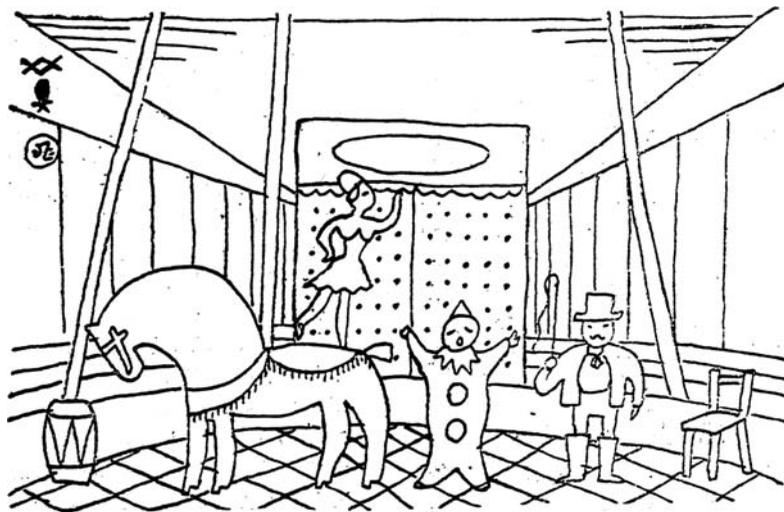
#### 畫廊で開催

昨年の秋畫廊で新作陶器の展覽會を開催し頗る好評を博した京都清水の若き陶工西川清翠、岡本爲治、木村二瓶子の三氏が出張して顔配のやうな面白い會を畫廊で開催する。樂燒は御存知の通り樂燒に各自勝手な繪を書いたり、字を書いたりして焼いて貰ふのだが自分で書くのがイヤなら前記の三氏に書いて貰つてもヨシ。十分か二十分待つてゐる間に立派に焼いてお渡しするといふ段取りで贈り物などには持つて來いの面白い品である、値段も安く次の通りである

額 皿	¥1.00	菓子鉢	¥1.00
湯 呑	0.50	小 皿	0.25
蓋	0.15	鐘 利	0.50
煙草入	1.00	灰 皿	0.50

粘土の方は自分の好きな形にひねつたものを陶工達に焼いて繪葉をつけてこらへ上げて貰ふので置物でも強でも、灰皿でも、思ふものをひねり出せばよい、傍らには本畫がついてゐるのだからむつかしい所は手傳つて貰ふ事が出来る一つ子供になつたようなりでも何か著破らしいものをひねり出すのも愉快ではありませぬが、繪葉の色や鏡具は御注文通りに上げて見せると三君は待つてゐる

【図版 C】 第 12 号 (1933. 1. 15) 掲載の「画廊一ヶ年の回顧」  
 (兵庫県立美術館所蔵)



川西英氏の版画サーカス



カルメン第二幕  
川西 英氏作  
過般神戸画廊、開催した川西英氏の近作版画展に出品されたもの、最近中間色を用ひて非常に深味が出来、頗る好評を博したものです。

【図版 D】「ユーモラス・コーベ」第12号（1933. 1. 15）〔上〕と「ユーモラス・ガロー」第23号（1933. 12. 15）〔下〕にそれぞれ掲載された川西英の版画〔2点とも兵庫県立美術館所蔵〕

の時期「神戸新聞」に小説を書いていた仲郷三郎<sup>9)</sup>が第15号（一九三三・四・一五）の「別車氏水彩画展評」（大阪毎日新聞四月八日所載）で、「佳作の中にも海港風景を描いた諸作は水も船も手に入つたもので、澗瀨たる生彩があり、市中風景では『神戸アルプスの雪』『布引新装』『再度より布引へ』『御影晚秋』等が心をひかれた」といった言葉を記している<sup>10)</sup>。

一方、ジャンルの見れば最も多くの展覧会が開催された洋画に関しては、一九三二年二月と翌年六月に開催された坂本益夫の絵をめぐる、第3号（一九三二・三・三）に稲垣足穂の「坂本君の神戸風景展」（又新日報二月十五日所載）、第18号（一九三三・七・一〇）に小松清の「坂本益夫氏個展評」（神戸新聞六月廿五・七両日掲載）がそれぞれ掲載されていることが注目される。とくに稲垣足穂の文章の方は、坂本の「自由な画風」、「他人の着物では自分に合はないとする気稟」が神戸の風景に向かつている点をよしとするともに、出来上がった絵を目にして覚える愛着を「それらはいづれも、女学院の裏の方とか、トアホテルやタンサン水の出る辺りにあると想像させられる家や街の一角を取扱つたもので私をして活動写真と青い瞳の少女を思ひながらあの辺りを歩いてゐた時代を、今更に懐かしく呼び醒ませるものであつた」という表現に託すことによつて、「星を売る店」や「或る小路の話」を読んでいる者にはさもありなと思わせる、足穂自身が一九二〇年代中頃に神戸を舞台に好んで描いた小説世界についての連想を呼び込むという機能も果している。と同時に、この一文は稲垣足穂を研究対象とする領域にあつては、初出紙が「又新日報」と判明していることも含めて、その著作一覧、作品年譜作成にあつて新たな一項を加えるという副次的な効果ももたらず<sup>11)</sup>。そして、すでに記した竹中郁のものした展覧会評や、文学史上では後の行動主義文学の時代に登場してくる小松清の美術評の場合をとつても、これと同じことが言えよう<sup>12)</sup>。

この節を終えるにあつて、ここまで取り上げてきた個人展覧会とは別に、画廊とゆかりの深い芸術家たちによつ

て構成されている各団体による展覧会も紹介しておく、神戸付近在住日本画家有志による鯉川会、洋画家たちを糾合した画廊会、染織工芸から木工に至るまでの雅芸品の制作と普及に取り組む雅芸会、写真家の中山岩太が今竹七郎とともに立ち上げていた神戸商業美術研究会などの展覧会が随時開かれ、その模様を伝える記事も「コーベ」ならびに「ガロー」に多く掲載された。また、画廊後援会による頒布展が頻繁に催されているのも見逃せない。同会は朝倉芥郎、福田眉仙、林重義、榊原一廣が発起人となり、一九三二年六月に美術愛好家たちに入会を呼びかけて始められたもので、入会者の負担を月一円で一年間として、画廊に集う画家たちの描いた絵画を贈呈することを約束、それを継続することによって画廊の経営基盤の安定を図ろうとするものであったが、発足半年後の時点では入会者が百名を突破したので、すでに半額を積み立てた最初からの入会者に対して直近の頒布会で気に入った絵の選定を行ってもらっている<sup>(13)</sup>。「画廊一九三八年の回顧」を見てもこの年は四回開催されているように、画廊後援会頒布展はその間もコンスタントに開かれており、「神戸画廊三ヶ年の変遷」(第18号、一九三三・七・一〇)中の言葉を借りれば、画廊後援会は同じ絵画の愛好者の集まりである「洋画観賞会」とともに、その時点での「画廊支持の主体になつて来た」<sup>(14)</sup>た。

## 5 〈東京〉との複層的な関係

個展を開催した美術家たちの中には、東京を活動の拠点とし、展覧会開催に際して来廊、神戸在住者と交流している者もいた。小品展開催の折に宇野千代とともに来廊して麻雀に興じた二科会々員東郷青児<sup>(15)</sup>、洋画個展を開き神戸を去るにあたって「コーベを垂れる」と題して「神戸、コウベ。ソーセージの家並に琥珀の陽が射す。山の青磁が流れて来る。たぬき<sup>(16)</sup>の酒は／ああ、君、そこは溝だぜ」のように始まる戯詩を置き土産として残していった<sup>(16)</sup>同じく

二科の向井潤吉、そして独立美術派協会々員の清水登之や里見勝蔵の作品も画廊の壁面を飾った。

このような親密なつながりが生じ、彼らからの刺激を受ける一方で、東京への〈對抗意識〉を示す記事や言説も画廊機関紙上には現れてくる。それは「残虐なるかな帝展——それでもコーベから特選二人」（「コーベ」第10号、一九三二・一一・二）のようなタイトル表記にも現れているし、「春になつて花が咲いて、鳥は謳はうといふい、時候になつたのに、此頃の神戸は本当にツマラない、みんな忙しさに飛び廻つてゐる、第一春には東京で展覧会が多過ぎるよ、製作、製作で夜を日についだ上、出来上つたら皆自分で絵を抱いて東京に出かけてしまふ（中略）どうもこうユ—モラス、コーベの材料が無くなつては困るぢやないか、脱線しろ、脱線しろ、神戸の画壇！我ユ—モラス・コーベの為に」といった口吻でも語られる<sup>17)</sup>。

おそらく、一九二〇年代より三〇年代に入つてからの方が、神戸美術界における東京とのドラスチックな関係性が増してきていると思われるのだが、神戸画廊と神戸ひいては関西洋画壇のために大いに気を吐いた存在としてここでマークしておきたいのは林重義である。大阪商船神戸支店勤務林兼雄の長男として神戸市中山手で出生、画廊が開設した一九三〇年に遊学先のパリから帰朝、神戸近郊の武庫郡住吉村に居を定めた林は、その年一月に清水登之、里見勝蔵らと独立美術協会を結成するとともに、同じ月には画廊で最初の個展を開く。以後、洋画小品展、ガッシュ画展、リトグラフとデッサン展、新作油絵展、素描淡彩展など、一九四三年の閉廊までに通算で九回の個展を開催している。画廊主大塚銀次郎とは、大塚の言葉を借りれば、「画家と画商との埒を越えた莫逆の間柄」となり「絵を描く時も遊ぶ時も一心同体のごと」<sup>18)</sup>く行動、彼が没したのは一九四四年だが、戦後になつて林の画と文、ならびに彼の知己友人たちが寄せた文章をまとめた『林重義』が神港新聞社から刊行された（一九五二年三月）際、その編集にあつたのも大塚である。そして、同書収録の伊藤廉、小磯良平、川西英らの文章が共通して想起しているのは、イタリ

アールネサンス時に生じた、その地域の芸術の伸張をはかるための各都市の鎬を削る攻防よろしく、機嫌の良い時には関西画壇をフィレンツェやシエナ派に対するベニス派たらしめようとする抱負、つまり東京を向うにまわした関西画壇確立への夢を盛んに呼号する林重義の姿なのだ。ただし、軽妙や洒脱を売りにする「コーベ」と「ガロー」には、そうしたことを真正面から述べ立てる記事は出てこない。その代わり、そこに掲載されているのは、書き手が本人であるのとそうでない場合との双方を含めて、豪放磊落であったり、時にはナイーブな心と体の弱まりを見せたりと、生の人間味を遺憾なく発揮しながら芸術製作に精進している林の人となりとを、あけすけにかつ温かな筆致のもとに伝えてくる記事である<sup>19)</sup>。そして、そのような感銘を与える記事が多数載る事自体が、林が画廊にとっての精神的支柱であり続けていたことを暗に示しているように思われる。

ところで、東京との関係性は画廊の営業体制、経営方針といった面からも考えられる。それは一言でいえば画廊の多機能化とも呼べようか。すでに「コーベ」第5号（一九三二・五・五）には「画廊の事業」と題して「各種展覧会」・「洋画観賞会」・「絵画の斡旋」・「美術懇談会」・「商業図案応需」・「文案編輯立案」・「出張写真撮影」・「各種染色定着」・「手工芸品応需」というように、その多角経営ぶりが紹介されていたが、こうした性格を開設自体は神戸画廊より早い東京新宿の紀伊國屋ギャラリーのそれと比較すると面白いかもしれない。一九二七年に田辺茂一が創業した紀伊國屋書店の階上に併設された同ギャラリーは、オープニング展として「第一回洋画大家作品展」を開催したのを皮切りに、「しらべもの展」、「国際光画協会作品展」、「近代建築写真展」など、ジャンルのには多様性を求め、規模としては〈上野〉を会場とするそれとは異なる、いわゆる小展覧会制度の実を挙げる方針をとっていた。また、そこは新進文学者らの集いの場ともなる。一九二八年二月に創刊、七月発行の第六号から紀伊國屋に発行所を移した文芸同人誌「文芸都市」に関わった浅見淵の記憶によれば、書籍売り場から二階にあがる階段の上には「フランスから

帰朝したばかりの阿部金剛の、うまいかまわずいかわからぬ超現実派の大きな絵がかかり、「月に一、二回同人一同が集まって編集会議をした」という<sup>20)</sup>。

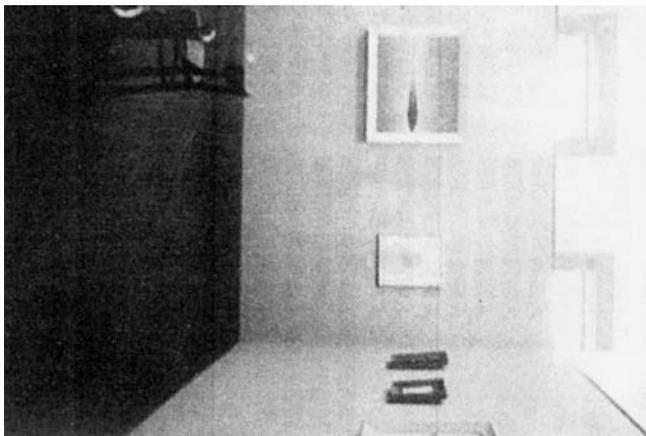
神戸画廊の方に話を戻せば、「画廊の事業」で挙げられたものの幾つかがその体制を整備していく、あるいはさらに新たな事業が開始されるといった動きがこの後に続く。すなわち、一九三四年には「性格写真」と銘打つ作品でその名を知られていた黒木鶴足が画廊二階スペースに「黒木鶴足スタジオ」を開設<sup>21)</sup>、三五年にも「画廊美術書籍部」や「画廊染織品部」が新設されていくのである<sup>22)</sup>。そして書籍部は「東京美術社、アトリエ社、みづゑ社、塔影社等」と特約し、各社の月刊美術雑誌をはじめ、各種の画集、美術刊行物を陳列即売<sup>23)</sup>、染織品部もまた「東京銀座の港屋の手織手染の工芸品が頗る好評なの」で設けるに至ったというように、双方とも東京との繋がりを伝えている。それが見様によっては、神戸画廊が東京との共振を図るといふ以上に東京からの影響を蒙る、ある種の東京のパッケージ化が一面において進んでいることも表しているかもしれないが、しかしこうした多層的な相貌を画廊が有することは、もうそれまでに「画家の画廊」から「愛好家の画廊」へと変遷を遂げてきた<sup>24)</sup>自らの存在意義をさらに前に推し進めるべく、神戸画廊が主体的に選択した道でもあったのである。

画廊機関紙の刊行が確認できるのは一九三九年一月までだが、その後の同画廊での催しのうち、あと一つ、文学と美術の相互浸透の動きがそこで図られたとともに、東京との繋がりをやはり感じさせるものを取り上げるとすれば、それは前衛画家として頭角を現してきていた浅原清隆の個展がそこで開かれたことではないだろうか。兵庫県加古郡阿閉村大中（現・西播磨町南大中）出身の浅原は帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）西洋画科入学後、反官展を標榜するグループ「表現」を結成、一九三五年、三七年に二科会展、独立展にそれぞれ初入選を果たし将来を囑望されていたが、一九三九年一二月と四三年と二度にわたって応召、一九四五年五月二九日にビルマ（ミャンマー）沖で行方不

明となる。三〇歳だった。

そんな浅原の最初で最後の個展が一九三九年七月一〇日から一三日まで神戸で開かれたのだが、その年は、彼が一九二〇年代より日本のシュルレアリスム詩を領導してきた詩人の北園克衛が主宰する「VOU」クラブに参加した年でもあった。ここで北園と神戸出身の青年文学者たちとの交流の一端を振り返っておくと、たとえば一九二〇年代はじめに上京した稲垣足穂や石野重道が、橋本健吉イコール北園克衛と同人的交わりを結んだ雑誌が、当時あってアヴァンギャルド芸術への志向を尖鋭に打ち出した「ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム(G・G・P・G)」（一九二四年六月創刊）であったし、それからやや下って一九二八年一月、「近頃流行の階級文学とやらは僕達に縁遠いものであるらしい」という「はじめの言葉」を口にして、井上昌一、米谷利夫、園邊高志、高橋敏夫を同人とする「薔薇派」が兵庫西宮を発行地として創刊されたのだが、この同人誌の同年一〇月号の表紙・扉・カットを担ったのは北園だった。そして今度は、浅原清隆なる若き美術家が北園の創り出す芸術圏に飛び込んできたという次第だ。

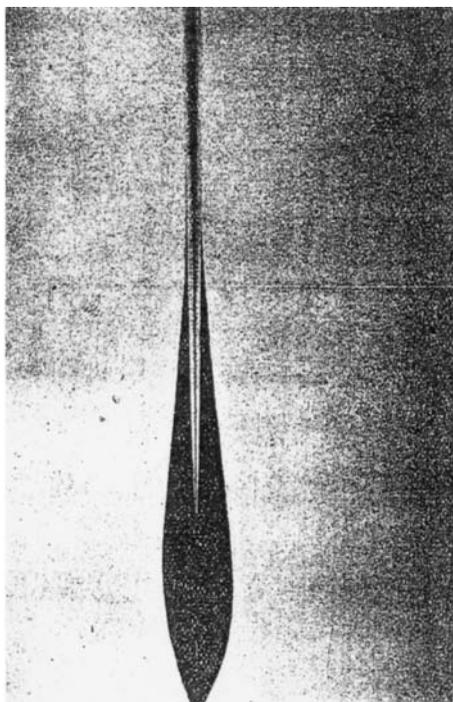
浅原の入会を告げた「VOU」第26号（一九三九・四）では、彼の油彩画「多感なる地上」が写真版で紹介されているが、それは彼の代表作の一つであるとともに、一九三〇年代の日本にあつてのシュルレアリスム系絵画の一つの極を示す作品である。続く「VOU」第27号（同・八）にも「郷愁」二点が紹介され、会員の近況を知らせる「DECOU-PAGE」欄には「VOUクラブ員浅原清隆は七月中旬神戸画廊に於て絵画16点の個人展覧会を開催した」との報告も出て来る。兵庫県立美術館で開催された小企画画展「画廊」をめぐる作家たち―「ユーモラス・コーベ」と画廊の青春」のパンフレット中には浅原の個展会場を撮った写真が掲載されており、それをみると「郷愁」が確かに展示されているのがわかるが、このようにして「VOU」の仲間たちの活動が東京と神戸とで同時並行的に行われていく【図版E】。



【図版 E】 左=浅原清隆個人展会場（神戸画廊 1939. 7. 10～13） [兵庫県立美術館小企画展「「画廊」をめぐる作家たち」

パンフレットに掲載]

右=「YOU」第27号（1939. 8）掲載の浅原清隆「郷愁」



郷 愁

また、同じ「VOU」第27号の「はがき通信」欄には、戦後になって「詩学」（一九四七年八月創刊）の編集に携わり、散文詩集『星の肖像』を刊行（一九五四年一月 昭森社）していく、この年五月に陸軍省から軍属として中支方面に出征した「VOU」同人の樹原孝一（木原孝一）が、東京を去る自分を浅原が見送ってくれた時のことを想起しつつ、「プラットフォム・シンバシ」に立つてゐた浅原清隆がリングのやうに光つてゐます」といった、印象に残る言葉を書きつけている。病気のため内地還送された直後に、自身の「ポエジイのシンセリテ」を賭して『戦争の中の建設』（二九四一・七、第一書房）という異色の戦場文学を書き上げた少年詩人木原孝一らしい表現だが、その彼をしてこんなプロフィールを書かしめる浅原もまた、静謐でリリカルなトーンを湛えたヴィジョンを画布の上に創出していく若き芸術家であつた。神戸画廊で個展を開く浅原の心のうちには、海を越えた向うにいる詩人からこうした言葉による橋が架けられようとしていたのである。

## 6 〈上海〉との文化的通路の可能性

大塚の回想に「当時神戸港は欧州航路の起点でパリ行の画家達はみな神戸画廊に寄つてくれた」とある<sup>(24)</sup>ように、パリを中心とする欧州から帰朝した、あるいは滞欧中、さらにはその地で没した画家たちの展覧会が画廊ではしばしば開かれ、それに関する記事が「コーベ」ならびに「ガロー」に掲載されたことも注目される。試みにその事例を「コーベ」からいくつか挙げると、第2号（一九三二・二・二）掲載の「木村磐男氏滞欧展を見て」（筆者＝岡成志、一月二十二日又新日報所載）、第4号（同・四・三）掲載の「横手貞美君の思ひ出」（筆者＝小磯良平、大阪毎日三月二十七日所載）、同じく第4号の「画廊日誌」欄に記されている「伊藤慶之助君の帰朝歓迎会開催」や「スイス国境に客死した「横手貞美氏追憶の会」といった記事、第9号（同・一〇・一）掲載の「伊藤慶之助氏個展評」（筆者＝竹中郁、大阪

毎日九月四日所載）などがそれに該当する。こうしたパリの空気が画廊に持ち込まれてくるにあたっては、これら美術展評を書いている、パリ遊学の先達者竹中郁や小磯良平の存在<sup>④</sup>が効いているのかもしれない。自宅に「海港詩人俱樂部」の看板を掲げ、そこから山村順の詩集『おそはる』をかつて発行していた（一九二六・六）竹中が、この詩集に友情の形見として三点の装画を寄せていた伊藤慶之助の滞欧中の作品に贈った言葉は、「こゝにある作品は小さなものばかりであるけれども、フランスの麵麩を食ひ葡萄酒をのんだエスプリが十分にかくれてゐる（中略）この小品展覧会を要約していへば、良い意味の名所絵にたのしく作者の旅行の跡をたどりゆき得て終に巴里に戻れば豊饒なフランスの都を手のうへにのせ得る感がある。手のなかの黄金の重み。これはこの五日まで『画廊』の壁にかゝつてゐる」<sup>⑤</sup>というものであった。

一方、神戸の港はパリのみならず、東アジアに向いても開かれているのであって、たとえば「コーベ」第18号（一九三三・七・一〇）からは、台湾での独立展を終えて神戸の波止場に降り立った清水登之、鈴木亜夫、鈴木保徳の動向を報じたものが拾え、第25号（一九三四・四・一〇）には「小磯・田村両氏の台湾風景洋画展」（筆者＝川淵辰雄、大阪毎日新聞三月十三日所載）が、小磯良平・田村孝之助の「台湾旅行通信」とセットになって載っていたりするのだが、こうした類の記事を追う中で問題にしていきたいと思うのは、上海と神戸画廊および画廊を通過していく人々との関係性、そこに生じる文化的通路のありようについてである。

一九三二年八月二五日発行の「コーベ」第8号に掲載された「画廊日誌」の「八月四日」の箇所には、「上海に行つてゐた独立展の会員清水登之氏が大阪の講習会のため帰つて来たので上海事変洋画展を今日から三日間開く。神戸には上海に馴染の深い連中が多いので興味深く眺められた」という記述がある。同じ頁には仲郷三郎「清水氏の上海事変画」（大阪朝日八月五日所載）もあって、従軍画家のブームが第二次上海事変（一九三七年八月）以降に生じるのに

先立ち、一九三二年一月に生じた第一次上海事変直後の戦跡を題材として成った清水の作品から得た印象を述べているが、ここで注目したいのは清水の画風それ自体のこと以上に、「画廊日誌」の記述に戻って言うと、彼の作品が「上海に馴染の深い連中が多」い「神戸」なので（「であればこそ」と換言することも可能ではないか）「興味深く眺められた」と記されている点、そのことである。東京と上海との間に敷かれる文化的通路を、絵画にフォーカスを絞って問題にする際に、一九三〇年代前半においてはどれだけこんな風に言われる関係があったか。仮にあったとしてそれと比較したなら、神戸におけるそれはいかほど前者を凌駕するものを持っていたのだろうか、すでに画廊開設以前の一九二九年冬から三〇年初めにかけて、上海にいる魯迅が、当時神戸の中山手通にあった「神戸版画の家」のオーナーの山口久吉に宛てて、彼を編輯兼発行者とし「神戸版画の家」から発行されていた版画集形式の版画誌「HANG A」を注文している一事<sup>①</sup>を顧みても、興味が惹かれる問題である。

だが、残念ながらこの点についても今後の課題へと持ち越されそうだ。というのも、「コーベ」「ガロー」の活字面を追ってみる限りでは、絵を通じて「神戸には上海に馴染の深い連中が多い」ことを明瞭に告げる記事には行き当らなかったからである。その責めを少しでも塞ぐため、最後に、この問題に繋がる蓋然性がある程度は有していると言えそうな画廊と関わった画家の動向や、「コーベ」に載った記事について述べることにする。

その一人目としてマークできそうな存在が上野山清貢である。「コーベ」第27号（一九三五・二・一）掲載の「この不景気時代に渡欧の二画人」には、上野山が「今度廣田外相をマンマと一枚の肖像画でころげ落し」て渡欧の筆に出たことがくだけた文体で報じられているが、そうした放浪癖を持つエキセントリックな画家上野山は、これまた放浪の詩人金子光晴の『どくろ杯』（一九七一・五、中央公論社）における回想に拠れば、一九二八年冬から翌年春にかけては上海で過ごしており、蘇州への旅に金子を誘っていた。また、彼の神戸との関わりは、その一年前の一九二七年一

○月三〇・三十一日の「大阪朝日新聞」の「神戸版」に「赤艸社洋画展について語る」を寄せている点から推せば、その時点まで遡ることができ、くだんの「この不景気時代に渡欧の二画人」の方でも、上野山がこの女性のための絵画教室である「赤艸社」を創設した亀高文子の所に「居候をした」り、「神戸では展覧会も開いたこと」を記している<sup>28</sup>。ついでに言えば亀高文子は、元町鯉川筋の三階建てのビルの貸間が「画廊」を開設するにはうってつけだと判断した大塚のために、それを借り受けるための斡旋の労もとった洋画家である。そして、その亀高が「コーベ」第29号（一九三五・五・二〇）掲載「佐藤章氏の個展」（四月三日大阪朝日新聞所載）で評する、神戸画廊で小品展を開いた佐藤章も、上海を中心とした江南の空気を画廊の中に運び込んだ一人だと言えるかもしれない。すなわち、そのタイトルはと言えば、「虎丘の塔」・「蘇州の白壁」・「西湖風景」・「三潭印月」・「上海店舗風景」・「官醬号」・「古色民家」・「戦禍の家」というものであった。

あと一つ、今回閲覧し得た「コーベ」ならびに「ガロー」の発行時期との関係から見て、それよりやや後に生じた出来事として注目すべきことを挙げれば、洋画家村尾絢子の上海行きが挙げられよう。すなわち、彼女が上海に赴くのは一九四〇年の晩夏の候、日本敗戦による引き揚げまでの間、現地邦人女性画家として多岐にわたる活動を展開<sup>29</sup>した絢子の渡航以前の足跡を振り返っておくと、第一神戸女学校を出た後、東京の女子美術専門学校（現・女子美術大学）高等科洋画部に入学、一九三六年には新制作派協会の立ち上げにも関わり、三八年に同校を卒業、帰神している。そして同年七月一日から五日まで郷土での初の個展を、また「渡支」を目前に控えた一九四〇年五月二五日から二九日まで第二回目の作品展を、それぞれ神戸画廊で開催しているのだ。ただし、具体的にどんな作品がそこに出品されたについては詳らかにしない。ほぼ同じ頃の一九四〇年一月に大阪市立美術館で開催された第四回新制作派展の方には、「支那服をきる」と題する中国との関わりを早くも予想させるものや、「ひるさがり」と題する画が展覧され

たことが、新聞の記事からは明らかになるのだけでも<sup>80</sup>。

その代わり、管見では最後の時期にあたる一九三九年一月発行の「ガロー」に、村尾絢子の交友圏をめぐる興味深い記事があることを小論を締め括るにあたって指摘しておこう。

記事名は「鐵チヤンの送別会」。「結婚して神戸に来て六ケ年、二科から独立展、国展と発表機関を変へて行つた画家の中村鐵が再度活動の場を東京に移すにあたり、日ごろ親しくしている小磯良平のアトリエに集まる人たちによつて送別会が行われたことを報じたものだが、主賓の中村夫妻、小磯良平、竹中郁、大塚画廊生ら、その宴に連なつた十七名の人々の中に「村尾絢子嬢」の名も挙げられているのである。実は絢子と小磯良平、竹中郁との交流は、彼女の上京前から始まっていた。すなわち、一九三三年一月に第一回「神戸みなどの祭」が開催された折に、小磯が制作したボスターの画面中央において、竹中郁をモデルにしたシルクハットを被つた青年を背後に従えている、「港のクイーン」をイメージさせる扮装の女性のモデルとなつていたのが絢子だった。やがて絢子は、新制作派協会と関わりを強めて画家としてのスタートをきるわけだが、同協会結成時のメンバーの一人で、かつまた彼女の郷里の先輩にあたるのは小磯である。一九三八年七月一日付「大阪朝日新聞」の「神戸版」に掲載された「美術界たより」中で、神戸画廊での絢子の初の個展開催を知らせる一文は、出品される作品が「一三点あるとともに、「東京女子美術を第一席で卒業した小磯画伯の高弟」とのプロフィール紹介を行っている。

一方、小磯の生涯を通じての僚友竹中郁が『小磯良平画集Ⅰ』（一九七八・一一、求龍堂）に寄せた「小磯良平 人と作品」を見ても、時は新制作派協会創立前後、神戸は山本通にある小磯邸のアトリエの様子を回想した箇所には、「主屋と離れて建つたアトリエへの出入りは、以前と比べて遥かに気がおけないので、友人画家やジャーナリスト、それに稀には絵を買う客が引きも切らぬようになった。中村鉄（現在中林画廊主、その頃は画家）、小松益貴、中川郷一

郎、山口久一、榊井一夫、村尾絢子、増田雅子などが盛んに出入りをした。わたくしもその一人だったが、わたくしを除いてはみな画家志望で、かれらの目は理想と情熱にかがやいていた」と、やはり村尾絢子もそこに含めた芸術家たちの集いが記されている<sup>80)</sup>。おそらく、そこに流れる朗らかにして華やいだ空気と、画廊の中を流れるそれとの間にそう大きな開きはなかったであろう。ただ、絢子が上海に赴く年は「皇紀二千六百年」と呼ばれる、それとは違う意味での祝祭ムードが生じた年でもあった。この一年前、一九三九年一月発行の「ガロー」も、同紙が年賀状の「国策式儉約の代用品」であって、以後の発行も不定期ならざるを得ず、「余りアテにせずにお待ち願ひます」との言葉を「再刊の弁」中に記している。さらに同紙には、あの川西英が、日本版画協会が「北中支戦線」に文展無鑑査級の版画家を派遣するに際してその交渉を受け、出発は四月頃になったことを報じる記事も載る<sup>82)</sup>。こうしたことをふまえると「鐵チャンの送別会」が開かれ、その様子が「ガロー」に掲載されたことが、時局の重たさがのしかかってくる前に、神戸画廊がそれまで積み上げてきた画廊らしい明るさを示していく、やや大げさにいえば何やら一つの夕映えのようにも思えてくる。

注(1) 神戸海外移住と文化の交流センター内「移住ミュージアム」にて情報提供を受けた。

(2) 平成15年度常設展示第Ⅲ期小企画「画廊」をめぐる作家たち『ユーモラス・コーベ』と画廊の青春』（二〇〇三・一・二一～二〇〇四・二・二九）。

(3) 『孤高の画家・鈴木清一の作品と生涯』での参考資料としての「ユーモラス・コーベ」の取り上げられ方は「データペー  
ス『ユーモラス・コーベ総目録』（鈴木耕三編、未公開）」となっている。

(4) たとえば「ツマラネーツマラネー KOBÉ, KONOGORO NO SAMISHISA」(第15号、一九三三・四・一五)、「ユーモラスにユーレーあられ 各派更生の途を説く ゆめゆめ信ずる事なかれ」(第20号、同・九・二五)、「丹下左膳 林重義

- 『舞妓』の生みの苦しみ」(第25号、一九三四・四・一〇)など、いずれもその題名からして読者の目を引き付ける才を示している。
- (5) 『朝倉斯道随想集』(一九七三・九、兵庫県社会福祉協議会)の「I 回想 朝日新聞神戸支局時代の想い出」中の一節「元町の異国情緒」から引いた。初出についてはまだ確認できていないが、朝倉がこの歌を掲載した新聞は「大阪朝日新聞」(の神戸版)、掲載時期は彼の神戸支局への移転時と「この時分は行進曲ばかりだった」という同文中の言葉から推して一九二八、二九年以降と思われる。
- (6) 大塚銀次郎「今井朝路と川西英」(『神戸史談』26号、一九七〇・一)が「咲いたアザミに陽はうすれ／お堀のバンコに灯はゆらく／きょうは宵ドンあす天気／お鳩の時計がクッククック」と、その歌詞を紹介している。
- (7) 「川西英の版画展」中の言葉。注(6)で出した大塚の「今井朝路と川西英」をここでも参照すると、川西の生家は「兵庫県東出町に代々伝わる旧家で回船業を営み、雑穀昆布乾物を扱う大間屋淡路屋善右衛門と名乗っ」たとのこと。そして一九二五年に碧梧桐派の俳人でもあった兄の和露が没した後、七代目善右衛門を襲名した英が人に与える一面の印象については、「額が広く禿げ上り常に微笑をたたえている温顔長身の容貌より受ける感じは兵庫の長者川西善右衛門」と述べている。
- (8) 「神戸画廊三ヶ年の変遷」(『コーベ』第18号、一九三三・七・一〇)。
- (9) 「コーベ」第3号(一九三三・三・三)掲載の「画廊日記」参照。
- (10) この時期の別車の作品は、彼が勤める兵庫県立工業学校電気科を卒業した新進詩人能登秀夫の第二詩集『都会の眼』(一九三三・七、文学表現社)に挿画としても用いられた。その点については拙稿「〈こわれた〉街・〈騙り〉の街への遠近法―神戸発・昭和詩始動期の詩人たちの仕事―」(『昭和文学研究』第73集、二〇一六・九)を参照されたい。
- (11) 筑摩書房版『稲垣足穂全集』刊行以降、「ユリイカ 総特集稲垣足穂」(二〇〇六・九)、高橋信行編『足穂拾遺物語』(二〇〇八・三、青土社)などで新たに発見された足穂作品の紹介はその都度行われているが、管見では「坂本君の神戸風景展」のことはまだ指摘されていない。
- (12) 『竹中郁詩集成』(杉山平一、安水稔和監修、二〇〇四・六、沖積舎)のように、生前刊行詩集未収録分のもも含めて詩についての調査はかなり進んではきているが、他の分野も含めて彼の作品の全体を鳥瞰し得るものはまだない。ちなみに

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

七四

- 「コーベ」ならびに「ガロー」に掲載された竹中郁の文章は「白髪野若造」名やアンケート回答の類も含めて11点ある。
- (13) 「画廊後援会の趣旨」(第6号、一九三二・六・六)、「画廊後援会の事」(第11号、同・一一・五) 参照。
- (14) 「コーベ」第7号(一九三二・七・一五) 掲載「宇野東郷麻雀模様」参照。同記事と同じ紙面には七月二日から二四日まで画廊で開催される「東郷青児小品展」の案内が東郷の作品の写真入りで載っている。
- (15) 「たぬき」は当時三宮神社の境内にあったおでん屋。「朝倉斯道随想集」所収「珍客万来の縄暖簾」には、この店に集う朝倉たちグループが、洋画家の林重義、絵具屋の吉岡三郎、船主会主事で傍ら絵描きの阪本清雄、画廊主大塚赤面子らを常連とし、時折川西英や写真師の黒木鶴足が加わったことが記されている。
- (16) 「コーベ」第16号(一九三三・五・一七)。
- (17) 「ツマラネーツマラネー KOBE, KONO GORO NO SAMISHISA!」(「コーベ」第15号、一九三三・四・一五)。
- (18) 大塚銀次郎「私の神戸五十年史」(「神戸史談」224号、一九六八・一)。
- (19) 林自身が書いたものを挙げると、いずれも他紙からの転載であるが、第5号(一九三二・五・五)に「林重義氏起死回生之図」とセットになって掲載された「挽歌」(四月一日文藝春秋所載)をはじめとし、第28号(一九三五・三・二〇)掲載の「散髪」(アトリエ一月号所載)や第31号(一九三七・四・二)掲載の「旅つれづれ」(東京帝国大学新聞所載)といった随想的文章に彼の個性は遺憾なく発揮されている。他方、彼の行状を伝える多数の記事も、その人柄を彷彿させるものばかり、中でも印象的なのは妻を急病で亡くした時の彼の様子を伝える「林夫人の本来」(第6号、一九三二・六・六)である。短いので全文を紹介すると「林重義君の奥さんが遂に亡くなった。十有余年糟糠の妻、何から何まで委せてゐた林君の落胆の程は想像に余りがある、亡くなった時に居合せたものが奥さんの名を林君に尋ねたら『ユキだ』『字は仮名ですか』『多分片仮名だらう』豈図らんや本名は『幸子』だった、林君曰く『そんな事はみんな家内が知つてゐたんだ』というものである。
- (20) 浅見淵『昭和文壇側面史』(一九六八・二、講談社)。ここでは講談社文芸文庫『昭和文壇側面史』(一九九六・三)を用いた。
- (21) 「黒木君のスタヂオ」(「コーベ」第26号、一九三四・一一・三三)。なお、黒木の「性格写真」については、「コーベ」第6号掲載のXYZ生「黒木氏の性格写真」(又新日報五月一日所載)が、「黒木鶴足氏の性格写真を画廊に見る。性格写真と

はどういふ事を意味するかわからなかったが、展覧会を見ると成る程とうなづかれる。実際その人間の持った性格をよく現はしてゐる」と述べ、その例として故小出植重を写した「画室にて」などを挙げている。

(22) 「コーベ」第28号（一九三五・二・二〇）、29号（同・五・二〇）にそれぞれ告知文が掲載。

(23) 「神戸画廊三ヶ年の変遷」〔「コーベ」第18号、一九三三・七・一〇〕。

(24) 注(18)と同じ。

(25) 二人がパリに向けて出発したのは郁が一九二八年三月、小磯が四月。帰国は両者ともに一九三〇年二月。

(26) 「伊藤慶之助氏個展評」〔「コーベ」第26号〕

(27) 「魯迅全集」18「日記Ⅱ」（一九八五・一一、学習研究社）に拠れば、魯迅は一九二九年二月二十六日に「神戸版画の家」に手紙を出し、続けて三〇年一月二十七日には代金と手紙を送付、二月一日に「HANGA」五冊（第三、四、一三、一四集各一帖と特集一帖を受け取っている）。

(28) 上野山の展覧会が神戸画廊で開催されたかどうかについては未詳。一九三一年から三四年までの展覧会情報を載せている「画廊一ヶ年の回顧」中には出てきていない。

(29) 「早稲田文学」二〇一八年夏季号掲載予定の拙稿「戦争の世紀を生きた二人の「マドモアゼル・M」の物語・序説——室伏クララと村尾絢子の上海時代——」を参照されたい。

(30) 兵庫県立美術館で新制作派の機関誌「新制作派」第四号（一九三九・一一）を閲覧中、たまたまその中に挟まれていた「18th Jan 1940」とのメモが記された「新制作派展評」と題する新聞記事の切り抜きによって、「支那服をきる」という画題を知った。ただし、この記事の出典はまだ確認し得ていない。一方の「ひるさがり」は一九四〇年一月一八日付「大阪朝日新聞」朝刊掲載の春山武松「第四回 新制作派展評」中で確認。

(31) 本文引用は竹中郁『消えゆく幻燈』（一九八五・三、編集工房ノア）に拠った。

(32) 「川西君の支那行」。

### 〔付記〕

本稿は日本近代文学会関西支部二〇一七年度春季大会（於・同志社大学）のプログラム中、「連続企画『異なる関西——19

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

20・30年代を中心として』の第四回「視差から立ち上がるもの」において行った、「大阪朝日新聞神戸支局員と鯉川筋神戸画廊の活動から見えてくる神戸の文化空間」と題する報告、およびそれをもとに執筆した「神戸モダニズム空間の〈奥行き・広がり・死角〉をめぐる若干の考察」（日本近代文学会関西支部出版企画編集委員会編『異』なる関西―1920・30年代を中心として―）（二〇一八年六月刊行予定、田畑書店）所収）の内容と一部重複するものである。

## 補助資料 「ユーモラス・コーベ」・「ユーモラス・ガロー」掲載記事題目一覧

### 〔凡例〕

- ・本稿中でも述べたように、同紙に掲載された記事の特徴の一つとして、見立て、なぞかけ、パロディ、軽みなどのくだけた味を持つその多いことが挙げられるが、それぞれのジャンルを峻別して記載することは難しいので、その点は省いた。「五目並べ画廊名人番付」、「ワイ・びっくりした」といった題目それ自体と、幾つかの記事についてはそれに付けたコメントに拠って、そうした傾向を把握していただきたい。
- ・コメントを付す場合は（へ）内にそれを記した。
- ・同紙には各展覧会に出展された作品の写真版、画を中心とした記事、記事本文に添えられたユニークなカットが頻繁に載る。それらについては（画）、（木版画）、（画と文）のように記した。写真記事についても同様にした。
- ・同紙には各美術展評を中心として、他紙・他誌から転載された記事が多い。該当するものは、各記事題目の後にその出典を本文表記のまま（ ）を付して記した。
- ・広告や画廊経営に関する告知については、原則として最初の掲載時に採り上げ、重複の記載は避けた（ただし「ユーモラスよろづ案内」「ユーモラス仕込案内」などといった記事はその範疇としては扱わない）。
- ・奥付については、第1号のその後、記載内容に変更があった場合にその旨を記した。
- ・漢字は原則として新字体に改めたが一部旧字で残したものもある。仮名遣いはそのままとした。
- ・各記事タイトル、もしくは著者名の下に記した数字は掲載された頁（面）を表している。
- ・その他、この一覧を見るにあたって留意すべきことがある場合は、その都度当該箇所その旨を記した。

第1号 1932年1月1日

創刊の辞

画家志望者 天文試験問題 答案解説 日本人アイ・セブンスキー

長唄「画廊」 作詞 酒留波綺纒 作曲 杵屋満十郎

絵廊派歌留多

(画)〈画廊の外観スケッチ〉

(広告) 投稿歓迎「他人の生活を脅かさない程度の悪口蔭口憎れ口」以下三例

画廊一月の予定

一日―五日 祝賀休廊 六日―九日 神戸洋画観賞会 新着名家作品展

十日―十二日 第六回 鯉川会日本画展

十四日―十七日 小磯良平氏 洋画個人展覧会

十八日―二十日 第十回 商業美術展覧会

二十日―二十五日 木村磐男氏 滞欧作品展覧会

二十七日―三十日 画廊同人作 額絵皿入札展覧会

伊藤廉氏の個展を見る(十二月六日大阪朝日所載)

林武氏の個展を見て(十二月一日大阪毎日所載)

第八回商美展を見て(十一月十九日大阪毎日所載)

五日並べ画廊名人番附

坂本益夫 2  
元川克己 2  
小高親 2  
2

1 1 1 1 1 1

画廊一ヶ年の回顧（1931年）

〔広告〕 趣味の額絵皿 画廊で焼付（写真）

画廊日誌（11月20日～12月10日）

ユーモラスよろづ案内

何処で？何を見て？何う思つた？

〔①上筒井のサロン・プツペで 福井市郎君の『人形』を見て 先生やつたなと思つた〕以下⑥まで）

もし百万円持つてたら

立案 奇餅想造

〔佐野実氏（医学博士）以下一三氏からの回答を掲載〕

里見勝蔵氏筆『静物』神戸洋画観賞会新着名家作品展出品（画）

奉天特派員便り（12月17日発）

画廊人銘酒鑑

赤垣源三（投）

昭和六年十一月卅日締切 麻雀得点表

\*奥付 発行所 神戸市元町一丁目鯉川筋画廊

編輯兼発行人 神戸市灘区河原町五九一 大塚銀次郎

印刷人 神戸市神戸区下山手七丁目 高見 太郎（2号奥付では「高見重太郎」）

定価 十部まで金一円

第2号 1932年2月1日

百万円抗議

〔前号に『若し百万円持つてゐたら』奇餅想造—といふ記事が出てゐましたら果然各方面より次の如く抗議が来ました。全文を掲げて謹んで取消します』という言葉と、大阪朝日神戸支局長朝倉斯道・又新日報主筆岡成志・詩人

竹中郁・写真師黒木慶男の「抗議文」

なぞかけ風な画廊人乗物見立

ワイ・びつくりした

洋風に飾つた床の間（画と文）

〔軸の代りに油絵かけて。書棚に蓄音器。花瓶に花でも入れておけば。畳の上での椅子テーブルでも不自然ではありません。足触りも柔かに。紅茶の薫りも心地よい洋間です〕

画廊動物園

パリだより 大森ケイスケ君より

麻雀得点表（一月中成績）

画廊囲碁級表

ムスメさんに マダムに

麦藁帽子の女（p15）木村盤男氏（画）

画家の歌

〔画けども画けどもなほ我がくらし楽にならざりじつと画を見る 啄木〕ほか3首〕

1 1 1 2 2 2 2 2 2 2

うるさき人々

寄贈図書（画廊備付）

〔たやすい版画の作方 兵庫東出町川西英〕ほか9点

三都大家日本画展を見る（十二月廿五日大阪朝日所載）

小磯良平君の個展を見る（一月十四日又新日報所載）

横はる裸婦（p 50）小磯良平氏（画）

木村馨男氏滞欧展を見て（一月二十二日又新日報所載）

東京だより

〔一月十五日 伊藤廉〕・〔一月廿六日 平野零児〕

画廊日記（12月14日～1月27日）

奉天珍画報（写真）

〔俵を曳くのは中央公論特派員の平野零児君、すまして乗つたのは大毎特派員の金子秀三君〕

画廊二月の予定

1日―4日 第九回 画廊会洋画展 5日―9日 吉田博一氏個人展

10日―12日 第七回 鯉川会日本画展

13日―16日 坂本益夫氏 神戸情緒風景展

17日―20日 第十一回 商業美術展覧会

22日―25日 田村孝之介氏個展

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

2 2

朝倉芥郎 3

竹中 郁 3

3

岡 成志 3

4

4

4

4

4

4

27日―28日 神戸アマチュア・パステル会 第二回会員作品展

ユーモラスよろろづ案内

〔野球 勝ちたいと思ふチームは申込まれよ、当分光輝ある歴史を尊重して上手に負けて上げます 画廊野球部〕

など六件の案内〕

第3号 1932年3月3日

洋画の納ひ場所 新しき建築家に望む

阪本清雄 1

画家の歌

〈ゑかき商売サラリとやめて 好きなモデルと手に手をとつて 抱いてくらしめてパトロンらしく せめて一夜の紅

1

い夢〉

画廊を設備した洋室 (画と文)

〔室の一隅にかうした画廊を設備したらマントルピースの上の絵もチヨイチヨイ取替られ気分を一新する事が出来るでしょう。今後の新築には是非必要です。〕

1

初対面 川西英氏の印象

仲郷三郎 2

VERY むつかしい画用日本語

Y. SEIYOJIN 2

〔モデルにもてる 柿かきなぐる 絵画習ふたかいがあつた 塾の人に軸を頼んだ 晩画廊へ行きませう〕

額絵皿の売れた記 (又新日報二月一日夕刊所載)

岡 咄眼 2

YOKATTA NE!

2

〔ロハの原稿ばかり書いてゐた佐久間君 大阪朝日ビル倶楽部の主事になる YOKATTA NEI〕以下、画廊関係者  
5名の近況〕

パリーだより（一月十日 伊藤慶之助） 2

画廊人円満番付 2

緊張した鯉川会展（二月十二日朝日新聞所載） 朝倉芥郎 3

〔鯉川会（神戸付近在住日本画家有志の団体）の今月の定例展覧会（神戸元町鯉川筋画廊）評〕

吉田氏の個展を見て（朝日新聞二月七日所載） 朝倉芥郎 3

〔神戸元町鯉川筋の画廊に開催されている吉田博一のガッシュ絵展覧会評〕

坂本君の神戸風景展（又新日報二月十五日所載） 稲垣足穂 3

〔元町鯉川筋の画廊に開催されている坂本益夫の個人展覧会評。〕それらはいづれも、女学院の裏の方とか。トアホ  
テルやタンサン水の出る辺りにあると想像させられる家や街の一角を取り扱つたもので私をして活動写真と青い瞳  
の少女を思ひながらあの辺りを歩いてゐた時代を、今更に懐かしく呼び醒ませるものであつた」と述べる。

神戸京橋風景 坂本益夫氏筆（画） 3

田村君の作品展に就て（二月二十四日毎日新聞所載） 小磯良平 3

〔元町鯉川筋の画廊で開催の田村孝之介展評〕

画廊武器目録 4

〔重爆撃機 林重義〕以下一七名の画廊関係者を兵器に見立てる〕

画廊日記（一月27日〜2月28日） 4

上海事件に奮起した画廊二勇士（写真）

4

〔画廊日記〕 1月27日の項に記されている、画廊同人朝倉智蔵、人見立夫両君の入営送別会で林重義と大塚銀次郎が軍服を着て大見得を切った様を撮ったもの

画廊三月の予告

4

1日―4日 第十回 画廊会洋画展 5日―7日 庚午社日本画展

10日―12日 第八回 鯉川会日本画展 14日―16日 柳川一鷗氏近作展

17日―20日 第十一回 商業美術展覧会 21日―24日 観賞会洋画展

25日―27日 横手貞美氏遺作展 28日―30日 湊弘夫氏工芸展

ユーモラス仕入案内

4

第4号 1932年4月3日

蔭口一例 東京の旦那様まゐる 御存じより

（文責在速記者）

1

〔あゝ、酔つた、酔つた、東京から神戸を荒しに来るやからは、何も独立に限つたわけぢやない、（中略）神戸は日本の玄関ぢや、ありとあらゆる芸術家は皆、一度は神戸を訪れずばなるまい、そして組上にのるがよい〕

三勇士談（カットと文）

画廊三勇士集

1

〔爆談三勇士 朝倉朝閑・榊原一廣・吉川博一〕以下「照明弾三勇士」・「婚弾三勇士」・「弾眼三勇士」・「酒弾（乱）三勇士」・「鉄砲玉三勇士」

1

ユーモラス・コーベより診たる 画家の体質 S 医学博士

知らなんだ

2 2

〔大塚銀次郎氏 画廊商売いいけれど 赤字続きとは知らなんだ〕以下、画廊関係者八名のプロフィールを紹介〕

続 百万円抗議 医学博士 金崎周朔

2

倫敦の時計塔 三宅克己氏 (洋画観賞会所蔵) (画)

2

エプリール発電 (四月一日)

2

画家百人一首

小倉百々子拔

2

〔藤原敏行朝臣 墨の絵も油絵も売れぬ世の中や質の通ひ路妻のなくらん〕ほか四首〕

第十回画廊会展を見て (大阪毎日三月三日所載)

榊原一廣

3

〔画廊会洋画展評。新入会員別車博資の作品に言及、「神戸の第一感はよく表現してゐる〕

柳川一鷗氏の邦画展 (大阪朝日三月十五日)

朝倉芥郎

3

第十一回商美展寸感 (大阪毎日三月二十日所載)

吉田博一

3

横手貞美君の思ひ出 (大阪毎日三月二十七日所載)

小磯良平

3

〔画廊日誌〕によれば横手貞美はスイス国境に客死。3月25日に彼の滞欧遺作展が開かれ、翌日追憶の会が平和楼

で開かれる)

湊氏の芸術と生活 (大阪朝日三月二十九日所載)

朝倉芥郎

3

〔元町鯉川筋の画廊で開催の洋画家湊弘夫の民芸展評〕

カンヌ海岸 (F6) 中山正實氏筆 (画)

3

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

八六

〈中山正實の未発表の洋画三〇点、神戸画廊に四月一日から四日まで陳列。そのうちの二つ〉

画廊日誌（3月1日～3月30日）

（3月13日 伊藤慶之助婦朝歓迎会開催）

（案内）所蔵絵画交換入札展規定

御注意 偽の中村研一

画廊四月の予告

1日―4日 中山正實氏洋画展 6日―9日 釣趣味の展覧会

10日―12日 富田溪仙氏春の新作展

14日―16日 鈴木清一氏 川西英氏 染色工芸バラソル展

17日―20日 第十二回 商業美術展 21日―24日 所蔵絵画入札交換展

26日―27日 即席染色 飾半巾入札展 28日―30日 黒木鶴足氏性格写真展

マヂメな広告

「洋画材料一切 文華堂」「額縁製造販売 洋画材料一切 だけ商店」「文房具絵具 洋画材料額縁 昭花堂」

第5号 1932年5月5日

挽歌（四月一日文藝春秋所載）

林 重義

〈酒好き自身の入院生活の一齣を綴る。「林重義氏起死回生之図」と題した画も掲載〉

NONSENSE DICTIONARY

（スマートより）

1

1

4

4

4

4

4

五月場所 画廊角力手捌き

〔福井市郎（カラスカシ）今井朝路〕ほか六番の取組みと手捌き

罪にならぬ番附

なぞかけ画廊人

〔田村孝之介とかけて 山案内人ととく 心は常々山の神（妻君）を信心する〕ほか一人の画廊人を取り上げる

画廊植物園

〔天津栗 大塚赤面子〕・「瓢箪 川西英」ほか一五名を植物・野菜に見立てる

第二回独立展における兵庫県作家の活躍（大阪朝日三月二十二日所載）

〔県下からの入選者摘記、林重義の作品五点紹介〕

商業美術寸感（大阪毎日四月廿日所載）

〔鯉川筋画廊で開催された第十二回目を数える神戸商業美術研究会の展覧会評〕

上高地大正池（P6）宮阪勝氏筆（画）

〔広告〕独立美術協会 第二回展覧会 5月5日—15日 大阪中之島 朝日会館

家庭通信

〔亀高文子家、林重義家など〕

パリだより

絵はがき集 〔大阪淡路町福井病院にて鶴丸梅太郎〕ほか三名

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

KEISUKE OMORI

4

4

4

3

3

3

鹽川淳一

東京にて 大塚赤面子

3

2

2

2

2

画廊日誌（4月1日～4月30日）

画廊五月の予告

1日～4日 第十一回 画廊会洋画展 6日～8日 諸大家色紙展

9日～10日 神戸創作図案協会 第一回作品展

11日～13日 第九回 鯉川会日本画展

14日～16日 第十二回 ドルメン洋画展

17日～20日 ペンテックス工芸展 21日～23日 第一回 雅芸展

24日～26日 中村貞以氏日本画展 28日～30日 久本弘一氏洋画展

（広告）画廊の事業

〈各種展覧会・洋画観賞会・絵画の斡旋・美術懇談会以下六種の事業案内〉

第6号 1932年6月6日

悪口雑言

里見勝蔵

静物（F8）里見勝蔵氏筆

天狗俳句選集

里見勝蔵・伊藤廉・林重義・林義雄・久本弘一・西垣キヨ

病院か？美術館か？

〈坂口通にある徳岡医学博士邸訪問記。同邸宅応接室の写真〉

湊弘夫君と犬

2

2

1

1

4

4

4

流石は一鷗關（柳川一鷗の豪傑ぶり）

第一賞の別車君

（別車博覧、日本水彩画展で「街景」と「ブリテン号」で第一賞獲得）

中元御祝儀の進物

（中川郷一郎君に……シルクハット）以下二五名への進物）

画廊会所感（大阪朝日五月三日所載）

仲郷三郎 3

（場内では別車博覧氏が一人気を吐いてゐる」とし、「街景」「兵庫港風景A」などについての印象を記す）

黒木氏の性格写真（又新日報五月一日所載）

XYZ生 3

（黒木鶴足の「性格写真」評）

ドルメン洋画展評（大阪朝日五月十五日所載）

中山正實 3

（東京美術学校出身の若い五氏の集まりである「ドルメン」の第二回展評）

雅芸展をみて（大阪朝日五月二十二日所載）

朝倉芥郎 3

（第一回雅芸展を見て。川西英、鈴木清一らの作品の印象）

エスキース 黒田重太郎氏筆（画）

3

（昨年之二科展出品作「巖蔭に憩ふ女」のエスキース）

川西君とオリンピック

4

山本君の改号（山本春邨が大慈と改号）

4

今井君のキヤフエ

4

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

〔元町五丁目で洋画研究所を開いている今井朝路が研究所の向かい側にフランス風のキヤフェを開く。名づけてラシクル、ブルウ〕

林夫人の本名

〔林重義夫人幸子の訃〕

東京から（東京ステーション・ホテルにて 福井市郎）

画廊日誌（5月1日～5月28日）

〔5月14日 夜「独立展を見ての画談会」開催〕

画廊六月の予告

1日―4日 第十二回 画廊会洋画展

6日―9日 大久保作次郎・鍋井克之氏等編纂 諸大家デッサン集展

14日―16日 久本弘一氏洋画展 17日―20日 第十二回 商業美術展

21日―23日 山本大慈 柳川一鷗 中元御贈答用団扇子扇色紙の会

28日―30日 山本魁スタヂオ作品展

画廊後援会の趣旨

〔一人の負担は月一円で一か年〕として、同後援会への入会を募る。発起人代表として朝倉芥郎・福田眉仙の名が載る〕

第7号 1932年7月15日

画廊チーム大勝 対「又新日報」野球戦―嘘ぢやないホンマの話―

〔画廊球団凱歌を唄ふの図〕と題する漫画あり

春陽会の流れ

〔甲子園ホテルでの春陽会懇親会が済んだのち、元町時雨茶屋での一行の親交〕

〔広告〕二科会々員 東郷青児氏小品展 7月22日―24日 画廊〔東郷の画も掲載〕

宇野東郷麻雀模様

〔東郷青児、宇野千代夫人とともに関西に来ての動向〕

三岸君のいたづら〔三岸好太郎について〕

三木氏の新築〔洋画家三木朋太郎アトリエ新築〕

国展来襲

〔大阪三越で国展開催中、神戸の会友が梅原龍三郎を担ぎ出して来神〕

初秋〔帝展出品画〕村上二雄氏〔画〕

〔7月15日より三日間画廊において最初の個展を開催〕

美術家聯盟の茶話会

ZRの正体〔小松清の意見に言及〕

松葉氏の来住〔国展系の作家松葉清吾の近況〕

林重義氏また入院

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 1

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

九二

吉田喜蔵氏も入院（芹屋洋画研究所の吉田喜蔵の近況）

福島金一郎氏の帰朝

他芸天狗

白髪野若造

〈6月21日から24日まで当画廊で開かれた他芸展第一回展評。「白髪野若造」は竹中郁のこと。〉

久本氏の個展を見て（大阪朝日六月十五日所載）

朝倉芥郎

〈当画廊での久本弘一洋画個人展〉

画廊日誌（6月1日―6月28日）

第8号 1932年8月25日

知らない間に 自分の好きな絵を 所得する方法

〈画廊後援会入会を勧める。〉

洋画糶売の成績

〈東京の画商石原求龍堂と室内者画室共催の第一回洋画糶売会が銀座の紀伊國屋ギャラリーで開催〉

困った話

菊 満谷国四郎氏筆（画）（神戸洋画観賞会 画廊所蔵）

聯盟オリンピック 小磯君平君走幅跳で一等

〈須磨駅浦海水浴場で開かれた催しものについて。「須磨浜珍角力」と題する漫画掲載。本文は3ページに続く〉

兵庫県美術家聯盟角力番附

3 2 1 1 1 1 4 4 4 3 3

隠し芸一般 第一回兵庫県美術家聯盟発表

〈中山正實君：端唄〉「竹中郁君：フランスの物売」など

林重義邸の解消

村田精一君の移転

伊藤慶之助君卜居

〈フランスから帰朝以来夙川甲南荘に止宿していた伊藤、武庫郡本山村岡本字中島に居を定む〉

村上一雄君の個展（大朝日七月十七日所載）

清水氏の上海事変画（大阪朝日八月五日所載）

〈4日から6日まで当画廊で開かれている独立美術協会々員清水登之の上海事変画展覧会を見て〉

眉仙氏の県下新風景（大阪朝日八月十六日所載）

〈当画廊で開催の福田眉仙の第一回兵庫県新風景展を見て〉

画廊日誌（7月10日～8月15日）

第9号 1932年10月1日

二科の関西展で 新入選画の陳列が問題 画廊における二科展画談会

〈9月21日から四日間二科系洋画展を画廊で開催〉

今年の二科入選者

新会員濱田葆光氏と新会友田村孝之助氏

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

3

3

3

3

3

4

4

4

4

4

4

1

1

1

1

1

新入選者も陳列に決定

アマアン・カルトンの発明にからむエピソード 画家の子供を持った研究好の老人

〈杉浦三郎の父が件の製品を発明する経緯〉

志摩風景 (F 4) 杉浦三郎氏筆 (画)

〈アマアン・カルトンに描いたもの〉

伊藤慶之助氏個展評 (大阪毎日九月四日所載)

竹中郁 3

〈こゝにある作品は小さいものばかりであるけれども、フランスの麵麩を食ひ葡萄酒をのんだエスプリが十分に  
くれてゐる〉

リオン河畔 (F 4) 伊藤慶之助筆 (画)

3

明く朗かな他芸展 (神戸又新日報八月廿日所載)

佐々木雄之助

3

眉仙氏の県下新風景 (大阪朝日九月十三日所載)

朝倉芥郎

3

商業美術展雑感 (大阪朝日九月二十日所載)

朝倉芥郎

3

中村貞以氏の名誉

4

小磯良平君のモデル

4

〈小磯が大阪朝日の下村千秋の小説に挿絵を描いてゐる〉

阪本清雄君と挿絵

4

〈阪本清雄が又新日報の阪本勝の小説に挿絵を描いてゐる〉

画廊洋画展公募

九月ノ鑑査員

林重義先生

十月ノ鑑査員

新井完先生

4

〈同展の目的、開催期間、出品数など八項目にわたって告知〉

画廊日誌（8月21日～9月24日）

第10号 1932年11月1日

惨虐なるかな帝展 それでもコーベから特選二人

〈日本画で三谷十糸子・東山魁夷、洋画で小磯良平・鈴木清一。本年度帝展審査員名掲載。「可愛い、小磯君」

中山夫人の渡仏

林重義君とぜんざい

画廊人芝居配役

東京より 便所にユーモラス〈湊弘夫からの短信〉

絢爛たる聯盟展 東都にも負けぬ大展覽会

〈兵庫県美術家聯盟第四回展覽会、10月25日から三日間大丸で開催〉

絵の価と観衆（神戸又新日報十月二十六日夕刊）

箱根から 独立秋季展を終へて〈高畠・里見らの短信〉

画廊洋画展公募（告知）

画廊洋画展審査について（十月一日大阪朝日新聞所載）

すげエ展漫評（大阪毎日十月廿三日所載）

六甲山 福田眉仙氏筆（画）

3

平田外喜二郎

3

林重義氏談

3

3

岡成志

2

2

1

1

1

1

1

4

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

九六

杉浦三郎氏洋画展（大阪朝日十月六日所載）

朝倉芥郎 3

カイ・スタヂオ凶案展（大阪毎日十月二十七日所載）

阪本清雄 3

酒弾三勇士討死の巻

4

田村夫人の入選

4

喜ぶ事・喜ぶ事

4

〈聯盟展第一日懇親会の模様〉

恐縮した柳川君

4

予告 淡交会の女流展 十一月五日から

四器会洋画展 十一日から三日間

画廊日誌（10月1日～10月29日）

4

第11号 1932年12月5日

対手は恐い検事局 負けてもダンない野球戦 3対2のクロスゲーム

1

しるこの食ひ方種々

1

歳末特別広告

1

〔小磯良商店 絆創膏 よく、つ、く事請合〕など〕

淡光会余話

2

よく似た名前

2

久保田君の落髪

2



画廊十二月の予定

1日―3日 第三回 画廊公募洋画展 5日―8日 伊藤継郎氏洋画展

10日―13日 岡田七蔵氏小品展

15日―17日 柳川一鷗子 山本大慈氏 日本画展

19日―20日 同情週間入札展 22日―24日 他芸会第四回展

25日―27日 三都大家日本画展

第12号 1933年1月15日

兵庫県美術家聯盟 第五回展は二十四日より大丸で 会員のみの作品で華々しく開催

レンメイ元気ソング

白髪野若造

〈美術家聯盟新年宴会の余興。作詞家「白髪野若造」は竹中郁〉

四海波静かだつたコーベの正月

川西英氏の版画展

「得意のサーカス物や、港コーベの風景などエキゾチックな内に独特のユーモアを漂はしてみる人の気持を子供の

やうに愉快にくれた」

川西英氏の版画 サークラス (版画)

画廊洋画公募展 講評は濱田葆光、田村孝之助両氏 締切は一月廿九日

林重義氏の新居

4

1

1

1

1

2

2

〔神戸衛生病院退院後、阪急御影停留場近くの郡家宮の浦の洋館風の家〕

厄を落した中山君

川西君のエン罪

用意周到な無名氏

小磯君のリトグラフ

画廊後援会申込の好機 第二回頒布は一月下旬

ハガキだより

盛んなりし絵画入札展 同情週間催物の親玉〔朝日新聞十二月二十五日所載〕

伊藤継郎君の作風〔朝日新聞十二月八日所載〕

〔多分のグロテスク味とリファインされた色感との交錯〕

邁進 福田眉仙氏筆〔画〕

邦画壇二新人の精進〔朝日新聞十二月十六日所載〕

〔神戸鯉川筋画廊における柳川一鷗、山本大慈両氏の新作邦画展〕

他芸展素見記〔朝日新聞十二月二十六日所載〕

画廊一ヶ年の回顧

〔観賞会新春洋画展：1月6日―9日〕から〔福田眉仙氏新春用邦画展：12月28日―30日〕まで七八の催しの名称

と開催期間〕

楽焼と粘土の会 二月十五日より十七日まで 画廊で開催

〔画廊〕から見る一九三〇年代の神戸文化空間

凶案宗画家寺 住職 久保田郁良

2 2

仲郷三郎 3 3

朝倉芥郎 3 3

鈴木清一 3 3

4 4

4 4

4 4

4 4

4 4

4 4

4 4

〈京都清水の若き陶工が出張〉

第13号 1933年2月16日

紅白両軍に分れて大暴れに暴れた美術家聯盟の懇親会

〈カットあり〉

国際愛のつどい

二人前の別車君

休胡さんのトロイカ

〈日本画家玉置休胡、多聞通にトロイカという喫茶店開業〉

有卦に入った眉仙老

林重義君の南紀行

博士になつた田中氏

〈他芸会会員の田中香苗、医学博士に〉

DOKO DE NANI MITA

〈洋画を展示しているカフェや喫茶店の紹介〉

展覧会予告

「伊藤氏のガツシユ絵展」・「神戸商業美術展」・「画廊後援会頒布展」・「榊原氏のモノチップ展」・「画廊の洋画公募展」

3

2

2

2

2

2

2

2

1

小磯良平氏のリトグラフ (画)

新聞と美術

「又新の兵庫大観」・「神戸の為永春水」・「三四郎と検事局」

聯盟展各部委員推薦 会期は二月廿一日からと変更 (大阪毎日一月二十八日所載)

川西英氏の版画展 (大阪朝日一月十二日所載)

竹中郁

〈鯉川筋画廊にて神戸ではじめての個展。「数にして三十九点。そのいづれを見ても氏の感覚の統制外のものはな

し」

画廊日誌 (一月7日〜2月4日)

4

第14号 1933年3月22日

戦争と美術

西田武雄

1

〈西田の著「GAKOSHIGAN」の一節をスクラップして紹介〉

酒飲みソング

1

〈竹中郁の作った「レンメイ元気ソング」に次いで画家の富永谷衣が発表〉

DOKO DE NANI MITA

1

神戸名物『二個連れ珍味』 独立展事務所で大好評

2

〈林重義はじめ画廊関係者の上京の様子〉

新井完氏の火イタツラ

2

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

林の後に林あり

亀高文子女史の奇禍

湊弘夫君のワイゼン

甲斐仁代女史とタヌキ

〈「タヌキ」は神戸三宮にある酒場〉

益田君のヨーヨー

神戸では岡田君

展覧会予告

「大野麦風氏新作紙本展」・「久本弘一氏油絵入札展」・「小山敬三氏洋画個展」・「中田繁氏経文仏画展」・「独立展会

員作品展」・「別車博資氏水彩画展」

モンテカルロ 伊藤慶之助氏筆（画）

画家への忠告

「クダモノ屋のオヤヂ曰く」・「或る素人園芸家曰く」

入選の喜び 独立展の入選者

〈兵庫県関係の入選者氏名掲載〉

林義雄君のポスター

伊藤君のガツシユ絵（大阪朝日新聞二月十六日所載）

榊原氏のモノチップ（大阪毎日新聞二月廿八日所載）

小島善太郎

仲郷三郎

2

2

2

2

2

2

2

3

3

3

3

3

3

3

3

3

4

4

静物 榊原一廣氏筆翰(画)

画廊日誌(2月14日―3月17日)

第15号 1933年4月15日

ツマラネーツマラネー KOBÉ, KONGORO NO SAMISHISAI

雪どけ 小山敬三氏筆(画)

退屈だつたら YOYO です

川西英君と風呂

(広告) 世界に於けるニユートン絵具の定評

田村孝之助君近来の傑作 神様でも気のつかない大名案

〈阪本清雄のアトリエでの阪本・田村・伊藤慶之助の雑談。田村のカット二点掲載〉

アドヤンのアトリエ

〈「アドヤン」はアドニス、サルーンの経営者で自ら美術雑芸家をもつて任ずる三木瀧男のこと〉

吉岡君の別荘住ひ

土井君の本職

吉田博一君の壺編輯

山田・馬場両君東上

早春 大野麦風氏筆(画)

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

東郷青児

4 4  
1 1 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 3

麦風氏紙本展寸感（大阪朝日新聞三月廿三日所載）

仲郷三郎 3

独立美術協会々員作品展（大阪朝日新聞四月五日所載）

朝倉茶郎 3

別車氏水彩画展評（大阪毎日新聞四月八日所載）

仲郷三郎 3

居留地にて 別車博資氏筆（画）

3

（七日から九日まで元町鯉川筋画廊で別車の初の個展開催。「佳作の中にも海港風景を描いた諸作は水も船も手に入ったもので、澁澁たる生彩があり」と評す）

画廊の予定

4

「独立系作家洋画普及展」・「第二十回神戸商業美術展」・「画廊後援会頒布展」・「向井潤吉氏洋画展」・「三木朋太郎氏洋画展」・「第五回創作図案展」・「中村貞以氏邦画展」

画廊日誌（3月22日―4月13日）

4

第16号 1933年5月17日

画家と REVIEW の女優 又新日報主催の座談会

1

（又新の岡（成志）主筆の発案によって行われた座談会の模様を赤面子（大塚銀次郎）が紹介。座談会出席者は画廊側が「大塚画廊生・丸尾長顕・吉田台二・竹中郁・向井潤吉・阪本清雄・小磯良平・大野麦風」、女優側が「天草美登里・長門美代子・熱海芳枝・三田早苗・松島詩子・安田静子・鈴木壽美子・小野小夜子」の面々。写真あり）

林重義門の一家

1

玄関は是非飾りなさい 洋画の額は目の線と直角に（神戸新聞五月五日所載）

無題 田村孝之助氏筆（カット）

コーベを垂れる

ジュン、エム

（向井潤吉の置き土産の作品。「神戸、コーベ。ソーセイジの家並に琥珀の陽が射す」という一節から始まる。）

向井君の神戸みやげ

2

阪本君の東京みやげ

2

今竹七郎君の近況

2

入選の喜び

3

春陽会・南画院・全関西・国画会

各紙の批評

神戸商業美術展寸評（又新日報四月廿一日所載）

阪本清雄

3

向井潤吉氏洋画個展（大阪朝日新聞四月廿八日所載）

朝倉芥郎

3

三木朋太郎君の絵（五月十六日大阪毎日所載）

小磯良平

3

シユミーズの女 三木朋太郎氏筆（画）

3

画廊の予定

4

「中村貞以氏邦画展」・「中村鐵氏洋画個人展」・「画廊後援会頒布展」・「葛見安次郎氏洋画展」・「乾田都氏邦画展」・

「熊谷守一氏洋画展」

写楽 赤襦袢 東坊城光長氏複製（画）

4

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

画廊日誌（4月15日―5月14日）

第17号 1933年6月15日

仙人には勝テンデス 脱俗した熊谷さんの生活 個展延期の弁明

〈文末に「赤面子」の署名あり。熊谷守一の人となりの紹介。写真あり〉

椅子に倚れる女 熊谷守一氏筆（画）

重役室に納まった阪本清雄画伯

〈神戸船主会の主事でもある画家阪本の近況〉

別府の山 中村鐵氏（画）

廉さんが酔払つて落して行つた紙片

福井君と岡田君

南展神戸に来る？

佐藤君の入選

多栄子さんの挿絵

〈赤艸社の金子多栄子、又新の夕刊の続き物「恋愛週間」の挿絵を描いている〉

神戸新聞は益夫君

〈神戸新聞の夕刊読物「森の洋館」の挿絵は坂本益夫〉

DOKURITSU BAR WINE LIST

4

1

1

2

2

2

2

2

2

2

2

2

〔「ドライ ジン（里見勝蔵）」、「アブサン（林重義）」など〕

各紙の批評

中村貞以氏の気品（大阪毎日新聞五月廿四日所載）

仲郷三郎 3

中村鐵氏個展評（大阪毎日新聞五月廿八日所載）

伊藤廉 3

葛見氏の個展を観る（又新日報六月三日所載）

竹中郁 3

街道（F 30）葛見安次郎筆（画）

3

葉書だより

東京より…向井潤吉 秋田より…仲郷三郎 湯の山より…富永谷衣 六甲より…岡成志

贈物に洋画 効果百パーセント

4

絵画の実費

4

無料揮毫

4

画廊の予定

4

「画廊後援会絵画頒布」・「坂本益夫氏の洋画展」・「大野麦風氏魚の絵展」

画廊日誌（5月22日—6月6日）

4

第18号 1933年7月10日

WINSOR & NEWTONS 大阪画廊の出現 心齋橋北二丁の中心地

〈英国のニュートン絵具で著名な WINSOR & NEWTONS Ltd の日本代表事務所が大阪画廊を新設。神戸画廊と連

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間



福田眉仙氏各国勝景展 17日―20日 画廊後援会頒布展 21日―23日

伊藤慶之助氏ガラス絵展 28日―31日

第19号 1933年8月12日

ユーモラス KOBE から GARO へ

〈本号より機関誌名を「HUMOROUS KOBE」から「HUMOROUS GARO」に改題。発行部数を五千に増加。題字をこれまで通り描く大阪高島屋図案部の今竹七郎への謝辞あり。〉

美術界漫談 (夕刊大阪新聞七月十五日所載)

いしばし生

大阪画廊の入場者数

野球狂時代 TIMELY HIT の野球美術展

〈野球美術展が全国大会に魁て神戸と大阪の画廊で開催。福田眉仙の「野球用団扇」と「野球扇子」が評判となる。〉

「画廊で販売。眉仙の「野球用団扇」の写真掲載〉

眉仙老の大閉口

大石輝一君の大名案

洋画家の本名スツパ拔

霊前に花の油絵 永久に遺る記念の品

〈洋画愛好家徳岡医学博士の親族の死にまつわる挿話〉

ハーゲンベックと川西君

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

（ハーゲンベック大サーカス来日に接した川西英の感激ぶり）

観衆 川西英氏作（木版画）

阪本清雄君の奇病

各派傑作の競演

創作図案の大阪進出

葉書だより

佐渡より：林重義 下落合より：川口軌外

熊谷守一氏の洋画（大阪朝日新聞七月九日所載）

眉仙氏の墨画（大阪朝日新聞七月二十日所載）

天草灘の月 福田眉仙氏筆（画）

海の風景展眺望（大阪毎日新聞八月十日所載）

朝倉芥郎  
仲郷三郎  
仲郷三郎  
仲郷三郎

第20号 1933年9月25日

ユーモラスにユーレーあらはれ 各派更生の途を説く ゆめゆめ信ずる事なかれ

〔帝展の行く道〕・〔二科の更生法〕・〔春陽会は転向〕・〔独立は飽迄独立〕・〔国展は一代限り〕の小見出し

神戸画廊における二科画談会 審査の内輪話

〈濱田葆光からの審査の状況についての話を受けての雑談を紹介〉

小山君の茶目ツ気持

2 2 1 4 4 4 4 3 3 3 3 3

小出卓二君のお冠り

別車博資君第二世

当人の知らぬ自画像

秋深画壇虫見立

二科院展を見る 県下の出品画評（大阪朝日新聞九月十四日所載）

風景 石井柏亭氏筆（画）

兵庫県美術家聯盟展 公募を交へて華々しく開催 十月廿四日より大丸で

個展時代来る 実力ある作家の進出すべき秋

〔文藝春秋〕九月号の「文藝春秋」欄の言葉を受けて

神戸 大阪 画廊の予定

〔独立美術会員素描展〕・〔東郷青児氏小品展〕・〔福井謙三氏滞仏記念展〕・〔第七回創作図案展〕

第21号 1933年10月26日

帝展ヤツパリ厳選 神戸で三人 大阪で十人 春と秋に分けては如何？

〈神戸の初人選は赤艸社の金子多栄子只一人〉

金山さんの人形

画人文人好取組

各部署員の活躍目覚しく 兵庫県聯盟展開く 一般公募作品を交へて花々しく

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

東京にて 大塚赤面子

2 1 1 1 4 4 4 3 3 2 2 2 2

- 吉田博一君とカラス 2
- 花嫁学校の絵の先生 2
- 岡田行一君の赤名刺 2
- 小磯家のお芽出度 2
- 画壇動物園 2
- みなとの祭近づく 装花自動車の立案に画家図案家が乗出す 3
- 〈大森啓助、今井朝路、梶原庄之助の名が挙がる〉
- 神戸 大阪 画廊の予定 3
- 「画廊後援会第十回頒布展」・「本年度帝展系作家展」・「ライジング商業美術展」・「岡田行一氏筆肖像画展」・「神原浩氏エツチング展」・「衣巻寅四郎氏洋画個展」・「大野麦風氏日本画展」・「松葉清吾氏デッサン展」 3
- 荒木陸相を描く岡田行一氏（写真）
- 各紙の批評
- 独立美術会員の素描（大阪朝日新聞九月二十二日所載） 吉田博一 4
- 神戸創作図案展評（大阪毎日新聞十月十八日所載） X Y Z 4
- 児島善三郎氏の個展（大阪朝日新聞十月二十日所載） 朝倉芥郎 4
- バラ（F8） 島雄 健氏筆（画） 4

第22号 1933年11月22日

西部劇『ドン・ゼンザ』

原作 吉田博一氏 脚色 大塚赤面子 1

〔筋書〕冒頭には「メキシコは西の端、ミナト・コーベに現はれた密輸出の常習犯ドン・ゼンザは」云々とあり。 1

細ぐ秋 大野麦風氏筆（画）

絵による若返り法 肖像画家の苦心

〈彫刻家福田青雲の場合〉

大石輝一君の喫茶熱

平田のアンチヤン転勤

ハガキだより 東京にて…小寺健吉 和歌山にて…林武 奈良にて…小島善太郎

釣る人 神原浩氏作（エッチング）

ウソみたいなホントのハナシ

神戸新聞記者英雄見立

〈朝倉芥郎（朝日）ほか十三名の新聞記者を見立てる〉

各紙の批判

帝展系小品展雑考（大阪朝日新聞十月廿九日所載）

港のエッチング展望（大阪毎日新聞十一月七日所載）

〔鯉川筋画廊で開催の神原浩「港のエッチング展」〕

朝倉芥郎 3  
仲郷三郎 3

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

一一四

衣巻寅四郎氏の個展（大阪朝日新聞十一月十一日所載）

竹中郁 3

「君は「樹木」「松」などを人間のやうに扱ひたいといふ。さもあるべし。君の生を吹き込まれた植物は場中で愛と真とを語つてゐる」

大野麦風氏近作展（大阪朝日新聞十一月十七日周防祭）

仲郷三郎 3

バラ 衣巻寅四郎氏筆（画）

神戸画廊の予定

4

11月21日―24日 児島善三郎氏色紙展

11月25日―26日 高橋雅子氏洋画個人展

11月28日―30日 湊弘夫氏作品展 12月1日―4日 福井市郎氏洋画小品展

12月5日―8日 川西英氏新作版画展

12月9日―11日 乾田都氏第二回日本画展

大阪画廊の予定

4

11月24日―27日 各派大家洋画展 12月1日―4日 赤野塾第二回洋画展

12月8日―11日 五洋会洋画展 12月12日―15日 小島善太郎氏洋画展

12月16日―19日 榊原一廣氏モノチップ展

船のある風景 上田清一筆（画）

4

第23号 1933年12月15日

師走顔見世興行扇港積かうべみなどつもちはなしあさひとけるゆき話旭解雪 無断上演随意

原作 三木瀧男 脚色 大塚赤面子 1—2

〔芝居脚本。画廊関係者十六名に「兵庫守 浅倉是道」のように、それぞれ役を振る。「序幕 城中兵庫守居間」

「第二幕 三木屋二階場」「同返し 狸穴亭離座敷」「第三幕 東海本街道の場」「同返し 本丸大広間」の構成〕

駒ヶ岳 袖木久太氏筆（画） 1

画廊野球部大敗 対創作凶案協会戦 3

鈴蘭 高橋虎之助氏筆（画） 3

不景気につき転向 3

〔エカキ、ヤメタラ 川西英君 代書屋に〕ほか十二人を対象に〕

神戸画廊の予定 3

12月13日—16日 五洋会洋画展覧会 18日—20日 鈴木清一氏染織画展

21日—22日 同情週間絵画入札展 23日—26日 犬の絵の展覧会

27日—31日 新春用画即売会

大阪画廊の予定 3

12月16日—19日 榊原一廣氏モノチップ展 20日—31日 和洋画即売会

各紙の批評

高橋雅子氏の作品（朝日新聞十一月廿八日所載） 元川克己 4

川西氏の新作版画（朝日新聞十二月六日所載） 朝倉芥郎 4

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

「氏は殊にサーカス、歌劇ものに興味を持ち、今度も曲馬（主としてハーゲンベック）やカルメンを多数デビューしてゐる」

カルメン第二幕 川西英氏作（木版画）

ハガキだより

駒込にて：碓伊之助 代々木にて：児島善三郎 東京にて：吉田博一

第24号 1934年2月7日

P.O.O.

さかも・きよ

〈酒癖をめぐる随感〉

自動車画廊に横着

独立美術会員道後行

〈野口弥太郎、三岸好太郎ら会員諸氏の道中記。「1、神戸港出帆」から「12、内海風光」まで〉

奇抜な病気見舞状 画廊同人から金崎博士へ

公園の少女（F12） 桑原儀一氏筆（画）

ドコで見たダレの絵が印象に残つてゐますか？

〈アンケート。竹中郁ら五人が回答〉

神戸画廊1933年の回顧

〈川西英氏創作版画展 1月10日―12日〉から「新春用和洋画即売展 12月24日―31日」まで五八件の催し物と開

4

3

3

3

2

1

1

4

4

催期間

神戸港 (F8) 久本弘一氏筆 (画)

ハガキだより

奈良にて…小島善太郎

渋谷にて…林武

東京にて…中山正實

第25号 1934年4月10日

丹下左膳 II 林重義 『舞妓』の生みの苦しみ

〈独立展に出品した二点の舞妓の絵を仕上げるに要した五日間の林の苦闘ぶりを語る。画も掲載〉

春は旅の話

藤堂君は紀州へ

林重義君は東京へ

福井君は支那へ

大野君は琉球へ

衣巻寅四郎君逝く

L.I.Lの提唱

〈前号の「P.O.S」の向うを張った発言〉

レビューの女 伊藤慶之助氏 (画)

新発明 油絵の表具

独立美術協会 会員犬見立 (東京同会事務所創作)

〈秋田犬…清水登之〉ほか十三名の見立て。末尾に鈴木亜夫からの訂正申し入れ文章も掲載

倫敦で客死した頓野氏の遺作展 友人知己の斡旋で

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

一一八

県下本年度 独立美術出品者展 茶話会も開催

絵画交換入札展 五月中旬に開催 (告知)

吉田喜蔵氏一派作品展

〈頓野の遺作展から〉ここまで神戸画廊が会場

大阪画廊の予定

4月11日―19日 桑重儀一氏洋画展

4月20日―22日 パレット同人会関西西部 創作写真展

台湾旅行通信

〔高千穂丸船上より (二月十一日)〕・〔台北にて (二月十三日)〕・〔白杵にて (二月廿四日)〕

小磯良平 田村孝之助

3

新嘉坡から

〈パリに向かう林武のシンガポールからの第一信〉

林武

3

各紙の批評

創作図案展を見る (大阪朝日新聞二月九日所載)

田村孝之助

4

小磯・田村両氏の台湾風景洋画展 (大阪毎日新聞三月十三日所載)

川淵辰雄

4

池畔の亭 小磯良平氏筆 (画)

4

宿がへ帳

〈伊藤慶之助、山本大慈、山本魁の転居を報ず〉

4

第26号 1934年12月3日

〈4月10日の第25号から八カ月ぶりの発行。誌名は再び「ユーモラス・コーベ」に戻る〉  
再刊の辞

〈定期刊行物ではないことを断り、「生かすも殺すもアナタまかせ」と述べる〉  
黒木君のスタヂオ

〈二年前に性格写真展を画廊で開催した黒木鶴足が、現在画廊の二階に写場を設営中〉  
画家音楽家見立

勝つた勝つた勝つた 画廊野球チーム  
藝術橋 F10 福島金一郎氏筆(画)

みなとのまつりに 浮れ出した画家連中 自描の面に顔を隠して元町通りを練り歩く

〈神戸の市民祭である「みなとの祭」を機会に兵庫県美術家聯盟有志で催した懇親会の行状記。「こも樽の鏡を抜いて」「大江山で百鬼の酒宴」「女王に飛付く恋人共」「竹中君のチャカホイ節」「群衆に投げキッス」の小見出し。写真あり〉

絵を買ふ秘訣

宮下家の国際里帰り

坊主頭の伊藤継郎君

田村孝之助君の失敗

小松君のお芽出度

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

3 3 3 3 3 2 1 1 1 1 1

ベラボーな大壁画

無料揮毫で義捐

初夏の山 F 4 榊原一廣氏筆(画)

同情週間に贈り度い物

各紙の批評

創作図案協会第十回ポスター展を観る(大阪毎日新聞十月十三日所載)

湊氏の染色を見て(大阪朝日新聞十一月十四日所載)

福島氏個展を見て(大阪朝日新聞十一月廿五日所載)

海辺 F 8 油谷達氏筆(画)

神戸画廊十二月予定

1日―3日 画廊後援会第十九回絵画頒布展

4日―7日 大野麦風氏近作画展 8日―10日 新井完氏洋画頒布展

11日―13日 福田眉仙氏邦画近作展 14日―16日 小磯良平氏近作洋画展

20―21日 大阪朝日新聞神戸支局同情週間絵画入札展

17日―19日 山本大慈氏日本画展 22日―24日 鈴木清一氏染色画展

第27号 1935年2月1日

画壇百人一首

久保田郁良

鈴木清一

竹中郁

〈藤島武二以下十八名の画家に見合う和歌を百人一首から選んで掲載〉

THE USE OF PICTURES (STUDIO 九月号所載)

画廊人煮しめ見立

今度来た知事さん―絵がお好き―

〈兵庫県新知事として来任した湯澤三千男の美術への造詣・関心について紹介。写真「兵庫県庁にて」(桑原前学務

部長、湯澤新知事、林重義画伯)も掲載〉

この不景気時代に渡欧の二画人(一月十五日新聞通信所載)

〈上野山清貢と久本弘一の動向〉

林重義君断髪の理由

久保田君のお芽出度

各紙の批評

山本大慈氏日本画展(大阪朝日新聞十二月十八日所載)

久本氏渡欧展を見る(大阪朝日新聞一月十九日所載)

〔広告〕「画廊の二階の黒木鶴足写場へお越し下さい」

画廊1934年の回顧

〈洋画観賞会諸大家展 1月7日―9日〉から「新春用洋画即売展 12月28日―31日」まで六六件の催し物と開催

期間〉

裏庭 上山二郎氏筆(画)

4

画廊の予定

2月1日―4日 独立美術協会々員田中佐一郎氏洋画展

21日―23日 国展会友福井市郎氏洋画展

25日―28日 国展会員辻愛造氏洋画展

3月7日―9日 神戸創作図案協会展 16日―18日 中川郷一郎氏洋画展

25日―29日 上賀茂織、颯々織 本染手織友禅展覧会

4月1日―3日 佐藤章氏洋画展 5日―7日 赤艸社バザー

第28号 1935年2月20日

THE PLEASURES OF OWNING PICTURES (STUDIO 九月号所載)

画廊美術書籍部新設(告知)

三月から新設。東京美術社、アトリエ社、みづゑ社、塔影社等と特約)

藤田嗣治氏のトランク

大臣にならぬ福井君

岡田君のランデブーカード

虎は死して皮を残し 画家は死して何を残すや

「福田眉仙 死して 黒眼鏡を残し」から「小磯良平 死して 竹中郁を残し」まで十四人の場合を挙げる

「かつくはなし(文藝春秋二月号所載)

小林和作

〈京都以来の相棒林重義の人となり。文末に林本人の言葉も紹介〉

温室 川西英氏筆（木版画）

川西君と高麗蔵丈

〈川西英と歌舞伎役者高麗蔵丈との出会いにまつわるエピソード〉

（広告） 額縁洋画材料 昭花堂 文房堂絵具代理店

散髪（アトリエ一月号所載）

白い橋 江田誠郎氏筆（画）

益田義信君の新婚旅行

（広告） 額縁製造販売 洋画材料一切 だけ商店

各紙の批評

川西英氏版画展を見て（大阪朝日新聞二月三十日所載）

「ここには中年の男の持ち得る豪快と言つたもの、芽生えと、未だに衰へやうとせぬ青年の新感覚が噴泉のやう

に絶えず湧いてゐる」

辻愛造氏の芸術（昭和十年三月三日神戸又新日報所載）

大野麦風展寸評（大阪朝日新聞三月十四日所載）

唐櫃村風景 辻愛造氏筆（画）

画廊の予定

25日―28日 上賀茂織、颯々織 本染手織友禅展覧会

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

2 2

林重義 3 2

3 3

3 3

3 3

竹中郁 4

尚蓼子 4

仲郷三郎 4

4 4

4 4

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

一一四

4月1日―3日 佐藤章氏洋画展 5日―7日 赤艸社バザー

11日―12日 福島金一郎、坂本益夫、中川郷一郎 三人洋画小品展

20日―22日 ドルメン洋画展

第29号 1935年5月20日

土を捻り絵を描いて 春泥会の京都陶行

1

〈神戸画廊に集まる人たちで一日京都に土いじりの会を行ったことを報じる。「春泥や徐々に行く水」をはじめとする黒木鶴足の言葉も並ぶ。黒木撮影の写真も掲載〉

〈告知〉画廊染織品部新設

1

桜の枝に短冊吊して 美術家聯盟の懇親会

2

油絵皿「椿」 藤村初恵氏筆

2

MODERN KOBE

2

〈元町通の印象をスケッチ風に紹介〉

美しい相互扶助 中村鐵氏の慰問展

3

赤マント後日譚

3

〈今井朝路の赤マントのその後の消息〉

各地だより

福島から（四月十五日福島県庁にて桑原幹根）

3

春陽会より（四月廿八日東京にて伊藤慶之助）

国展会場から（朝倉芥郎・福井市郎・辻愛造・川西英）

丘の家（f 8） 大森啓助氏筆（画）

各紙の批評

佐藤章氏の個展（四月三日大阪朝日新聞所載）

大森啓助氏個展評（四月廿六日大阪朝日新聞所載）

鈴木亜夫氏小品展評（大阪朝日新聞五月十一日所載）

長谷川君の個展のぞき（五月十四日大阪毎日新聞所載）

裸婦と花（f 12） 鈴木亜夫氏筆（画）

CONTRAST

〔湊弘夫（サイズ）小松益喜〕はじめ十組のコントラスト

画廊の予定

5月17日―19日 初夏民芸染織工芸展 20日―23日 画廊後援会絵画頒布展

24日―26日 芦屋洋画研究所展 27日―29日 上田清一氏洋画個展

6月1日―2日 新井完氏洋画頒布会 6日―8日 神戸創作図案協会展

第30号 1937年1月1日

〔前号から一年七カ月を経て刊行（再刊）。誌名が「ユーモラス・ガロー」に戻る〕

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

4 4 4 4 4 4 4 3 3 3

亀高文子

竹中郁

伊藤慶之助

小磯良平

阿呆陀羅經 再刊之辞

〈またも出ましたお笑ひ草は チヤカポコ チヤカポコ 神戸名物画廊のニュース チヤカポコ チヤカポコ〉

聯盟の新年懇親会

小磯邸のクリスマス

川西英氏創作版画カレンダー（神戸画廊蔵版二百部限定）（図版あり）

林重義氏の帰郷

版画第一王

〈漢詩〉

兵庫県名所図会

〈「眉仙窟」・「良平ヶ磯」・「英西川」など画家の名をもじった十七の「名所」解説〉

〈写真〉〈来神した藤島武二を囲んで。亀高文子邸で。黒木鶴足写〉

或る海岸 江田誠郎氏筆（画）

嗤文華君之禁酒

中村鐵君の個展にて（十二月十七日大阪朝日新聞所載）

川西英氏版画展を見る（六月三日大阪毎日新聞所載）

元川克己氏個展所感（十二月十一日大阪朝日新聞所載）

画廊一ヶ年の回顧

〈「月曜会第三回月例展 1月15日―17日」から「新春用画即売展 12月29日―31日」まで六九件の催し物と開催期

1

1

1

1

1

自憫公 1

2  
3

2

3

自憫公 3

小磯良平 3

黒木鶴足 3

鈴木清一 3

4

間掲載

赤の風景 前田寛治筆(画)

東京諸先生へお年玉 ユーモラスガローより

画廊主催ユーモア会

小松益喜君モーニングの会 一月廿五日午後四時 オリエンタルホテル

鈴木清一君のテノール独唱会 三月上旬の予定 青年会館社交室

第31号 1937年4月1日

彼氏はイツ生まれたか 神戸の画家の妊娠日想定

川西英氏創作版画カレンダー(神戸画廊蔵版二百部限定)(図版)

「毎月発行いたします。四月号は「春の唄」で赤と水色の二色刷です」

林重義氏の東京個展

美味求真

「鯛：岡田三郎助」「フグ：梅原龍三郎」はじめ十六の見立て

旅つれづれ(東京帝国大学新聞所載)

新緑 安井曾太郎氏筆(木版画)

画廊を改造したいデス 設計も御覧の如く出来ました ところで：サテ：少々困ったデス

「画廊が出来て足掛け八年、その間各種展覧会を開くこと「三百何十回」とあり。設計図掲載」

「画廊」から見る一九三〇年代の神戸文化空間

林重義

3 2 2 1 1 1 1 4 4 4 4

小磯良平君の友愛

中村鐵君の入院

各紙の批評

根木従之助君個展感（二月二十日大阪朝日新聞）

ポスター展を観る（二月四日大阪毎日新聞所載）

〈新たに神戸に生まれたポスター科学協会の作品展〉

各派彫塑展を見る（一月卅日大阪朝日新聞所載）

薔薇 山本鼎氏筆（画）

神戸画廊の予定

須磨絵吉氏洋画展 4月3日―6日 香田勝太氏洋画展 4月20日―24日

榊井一夫氏洋画展 4月下旬 永井宏氏洋画展 5月7日―9日

島雄健氏洋画展 6月12日―15日 東山魁夷氏日本画展 6月17日―20日

号数記載なし（巻頭にある新年挨拶より1939年1月発行と推測される。前号から一年八カ月経過。誌名は継続して「ユーモラスガロー」が用いられている。ノンブルがないので便宜的につける。2頁目に「再刊の弁」あり。）

（巻頭言）「戦捷第三年の春を迎へ新年おめで度く存じます」（以下略）。「昭和十四年元旦 大塚銀次郎」とあり）

（画廊紹介文）「画廊の展覧会場」（写真）と「画廊の間取り」図掲載）

（1）  
（1）

4 4 4 4 4 3 3

ユーモラス・ガロー再刊の弁

〈昨年中休刊した経緯と今後の刊行の見込みについて述べる〉

展覧会の意義（七月二十五日新聞通信所載）

川西君の支那行

〈日本版画協会から北中支戦線に派遣される版画家の一人として〉

奥入瀬 安井曾太郎氏筆（画）

鐵ちゃんの送別会

〈中村鐵の送別会、小磯良平のアトリエに集まる仲間によって〉

小磯君のモンペ姿

林さんと奥さん

鈴木君の骨折り損

辻愛造君の奇禍

画廊新春の計画

福田眉仙氏支那事変写生展 1月中旬 林重義氏日本画展 1月下旬

青山義雄氏新作洋画展 2月中旬 梅原龍三郎氏作品観賞会 3月中旬

富士 大森啓助氏筆

各紙の批評

山崎隆夫氏の個展（大阪毎日新聞二月十二日所載）

小磯良平（4）

辻愛造氏展を見て（大阪朝日新聞六月二十二日所載）

川西英（4）

麦風と魚の絵（大阪毎日新聞十二月二日所載）

仲郷三郎（4）

画廊一九三八年の回顧

（4）

「大森啓助氏洋画展 1月15日―19日」から「歳末奉仕洋画自由入札展 12月27日―30日」まで三九件の催し物と  
開催期間

（おおはし たけひこ・関西学院大学文学部教授）